

国連大学ゼロエミッションフォーラム・イン・千葉市
～挑戦！焼却ごみ 1/3 削減～

日時 : 2008年11月1日(土) 13:30-16:30
場所 : 千葉市文化センター3階 アートホール

プログラム

開会挨拶 林孝二郎 氏 千葉市副市長
三橋規宏 氏 国際連合大学 ZEF 自治体ネットワーク代表
千葉商科大学政策情報学部教授

基調講演 1 「循環型社会とゼロエミッション ～新3Rの役割を考える～」
三橋規宏 氏 国際連合大学 ZEF 自治体ネットワーク代表
千葉商科大学政策情報学部教授

基調講演 2 講演「地球と仲良くね！」
白井貴子 氏 シンガー・ソングライター、環境省 3R 推進マイスター
タンポポ児童合唱団とのミニコンサート

パネルディスカッション

テーマ:「挑戦！焼却ごみ 1/3 削減」

・コーディネーター

倉阪秀史 氏 千葉大学法経学部教授

・パネリスト

井上健治 氏 NPO 団体 GONET (ごみゼロネットちば 21) 代表

表 知子 氏 「焼却ごみ 1/3 削減」推進市民会議委員

児玉谷弘 氏 南町共栄会会長

高橋 晋 氏 イオンリテール株式会社環境社会貢献部長

深沢あゆみ氏 千葉大学環境 ISO 学生委員会

林孝二郎 氏 千葉市副市長

議事

司会

皆様、こんにちは。本日は大変いいお天気に恵まれました。お忙しい中多数お越しいただきまして、ありがとうございます。私、本日の司会進行役をさせていただきます、蔵本由紀と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

本日のゼロエミッションフォーラム・イン・千葉市につきましては、千葉市と国連大学ゼロエミッションフォーラムによる主催、環境省による共催で行われております。そして、本日は主催者のお二人による開会あいさつに続き、基調講演といたしまして、国連大学ゼロエミッションフォーラム自治体ネットワーク代表で、千葉商科大学政策情報学部教授の三橋規宏先生を講師としてお招きし、「循環型社会とゼロエミッション～新3Rの役割を考える」と題してご講演をいただきます。なお、三橋先生には、国連大学ゼロエミッションフォーラムを代表して、主催者としてのごあいさつもお願ひしております。

その後、基調講演 2 といたしまして、シンガー・ソングライターとしてご活躍され、ま

た環境省の 3R 推進マイスターとしても積極的に活動していらっしゃる白井貴子さんによるご講演「地球と仲良くね!」、そして、それに引き続きまして、白井さんとタンポポ児童合唱団とのミニコンサートをを行います。

そして、その後15分間程度の休憩を挟みまして、「挑戦! 焼却ごみ1/3削減～環境と資源、次世代のために今できること～」をテーマに、さまざまな立場のパネリストをお招きしてパネルディスカッションを行います。どうぞご期待ください。

開会あいさつ

司会

それでは、開演に先立ち、まず最初に、主催者千葉市を代表いたしまして、千葉市副市長、林孝二郎よりごあいさつ申し上げます。なお、林副市長は、第2部のパネルディスカッションにもパネリストとして参加いたします。それでは、林副市長、お願いいたします。

林副市長

皆様、こんにちは。千葉市副市長の林でございます。本日は、「ゼロエミッションフォーラム・イン・千葉市」を開催しましたところ、ご参加いただきまして、まことにありがとうございます。開催にあたりまして、まず、国連大学ゼロエミッションフォーラム、環境省、それから講演者、パネリストの皆様方のご協力をいただきましたことを深く感謝申し上げます。

さて、私たちは現在、大量生産、また大量消費、そして大量に廃棄する、こういった社会経済の中で、豊かで便利な生活を営んでおります。しかしながら、一方で、発生する膨大な量のごみ、またエネルギーの大量消費、こういったことで自然環境への負荷が大変大きくなっております。温暖化など、地球規模での大きな問題が生じてきております。このような中、今年の7月には洞爺湖サミットが開催されまして、世界各国の首脳が日本に集まり、その主要議題の1つが地球温暖化対策となっており、その中で、2050年までに温室効果ガスの排出量を現在の半分に減らそうということを世界に呼びかけたところでございます。皆様ご承知のとおりかと思います。

こういったことを背景に、千葉市におきましても、ごみ処理にかかる課題を解決しまして、次世代に豊かな生活環境を引き継ぐ、そういうことができるように、平成19年3月、昨年3月ですが、「環境と資源、次世代のために今できること～挑戦! 焼却ごみ1/3削減～」、これをビジョンとします新たな千葉市一般廃棄物ごみ処理基本計画を策定いたしました。この内容につきましては、第2部のパネルディスカッションの際に詳しくご説明いたしますが、簡単に申しますと、目標数値を定めまして、徹底的なごみの減量、再資源への取り組みを進めることで、焼却ごみの3分の1に当たる約10万トンを削減しまして、現在清掃工場、ごみを燃やす工場が3つあるわけですが、これを2清掃工場で作れるようにしていこうということを目指しております。

平成19年度から始めたわけですが、計画初年度であります19年度、焼却ごみが市民、事業者の皆様のご協力によりまして、その前年度と比べまして約2万4千トン、また今年度は、4月から9月までの半年間ですが、この間で前年度より約8千トン削減することができました。この間の市民、また事業者の皆様のご協力にこの場を借りまして深く感謝を申し上げます。

これは平成28年度を目標に今取り組んでいるわけですが、今後も焼却ごみの削減に向けて普及啓発などさまざまな取り組みを積極的に進めてまいりたいと考えておりますが、目標とする10万トン削減を達成するのはなかなか容易なことではないと考えております。このために、市民、事業者の皆様にもさらなるご協力をお願い申し上げます。

今日のゼロエミッションフォーラムも、そういったことの一環として開催させていただきました。本日は、廃棄物問題に詳しい先生方のご講演のほかに、日ごろ地域や家庭、また大学などでごみ問題について実践的に取り組みをなされている皆様方をお迎えしましてパネルディスカッション、そして白井貴子さんとタンポポ児童合唱団のミニコンサート、こういった多彩なプログラムを用意しておりますので、参加の皆様には十分お楽しみいただきたいと存じます。

今回のフォーラムを契機に、ご参加の皆様も加えまして、焼却ごみ 3 分の 1 削減のご理解を深めていただき、さらにこの運動を進めていきたいと思っております。よろしくご協力のほどお願いいたします。

終わりに、ご参加の皆様のご健康、ご多幸をお祈り申し上げまして、私のあいさついたします。今日はほんとうにありがとうございました。(拍手)

司会

林副市長でございました。

それでは、続きまして、もう一人の主催者である国連大学ゼロエミッションフォーラムを代表いたしまして、同フォーラム自治体ネットワーク代表で、千葉商科大学政策情報学部教授の三橋規宏よりごあいさつ申し上げます。

三橋国連大学 ZEF 自治体ネットワーク代表

皆様、こんにちは。国連大学ゼロエミッションフォーラムの三橋でございます。

きょうは、千葉市でゼロエミッションフォーラムを開催していただきまして、まことにありがとうございます。また、千葉市が焼却ごみを 3 分の 1 減らすという非常に大きな目標を掲げて取り組む決意をなさったということに対して、心から、敬意を表し、頑張っしてほしいと申し上げたいと思います。

皆さんは、ゼロエミッションという言葉をご存じでしょうか。実は、国連大学が初めて使った言葉でございますけれども、今から 15 年前の 94 年にさかのぼります。ちょうど 92 年に、国連が主催しまして、ブラジルのリオで地球セミットが開かれました。そのときに、アジェンダ 21 が採用されたわけです。アジェンダ 21 とは何かと申しますと、例えば国ベース、あるいは地方自治体ベース、あるいは大学、研究所、さまざまな分野で持続可能な社会をつくるための行動計画をつくらうということが地球サミットで合意されたわけでございます。国連大学としても、大学としての、アジェンダ 21 をつくらうじゃないかということで議論をしたわけです。その中で浮上してきたのがゼロエミッション構想でした。

ゼロエミッションという言葉自体は、文字どおり訳せば廃棄物ゼロということ。「エミッション」というのは廃棄物、排出物という意味ですから、その前に「ゼロ」がつくわけですから、「廃棄物ゼロ」という意味になるわけでございます。当時、国連大学の学長補佐をしていたベルギー人の実業家で、グンター・パウリさんという方がいまして、彼が「ゼロエミッション」という言葉を提案したわけです。

94 年のある日、そのグンター・パウリが私を訪ねてきました。当時、私は日本経済新聞社の論説副主幹で、社説の執筆とデスクをやっていたました。廃棄物をごみとして捨ててしまうのではなくて、資源として使おうというごみゼロ発想ということをそのときグンター・パウリさんが私に提案したわけです。94 年当時は、現在常識になっているような 3R という考え方はまだ表立って登場していませんでした。たかだかりサイクルという言葉ぐらいが使われていた程度です。その当時は、廃棄物は集めて最終処分場に持って行って埋め立てればよいというような考え方が支配的でした。日本は、バブル経済がはじけたとはいえ、毎年大量のごみがどんどん出るようになっていました。その結果、廃棄物を処理するための最終処分場もあつという間に不足してきたわけでありまして。

最終処分場が不足してきますと、当然のことですが、今度はごみ処理代が高くなっていくわけです。これではたまたま、何とかならないかということで、国も、地方自治体も、頭を抱えていたわけです。そういうタイミングの中でゼロエミッション、廃棄物を資源として活用するという新しい考え方が提起されたわけでございます。廃棄物を資源として活用することに成功すれば、ごみは出さなくて済むわけですね。そういうことで、ゼロエミッション構想に乗ってみてもいいかなというふうに思ったわけです。

時代を変えるためには、既存の考え方ではなくて、新しい発想が必要です。私は、ジャーナリストとして、ゼロエミッションを1つのキーワードにして廃棄物問題の解決に取り組めないかというふうに考えました。日本経済新聞がそのための役割を少しは果たせるのではないかというふうに考えたわけです。そこで、ゼロエミッションという言葉は初めて日本経済新聞の紙上で使ったわけです。その後、ほかの新聞社もゼロエミッションという言葉をもとにどんどん使うようになりました。最後までゼロエミッションという言葉を使うことに抵抗していた全国紙もありました。日経が最初に使った言葉を使いたくないというようなこだわりがあったのだと思います。しかし、1年もたつと、その新聞社もゼロエミッションという言葉を使うようになって、ゼロエミッションという言葉がマスコミでは一般用語になってきたわけです。

ゼロエミッション構想は時代の要請に合ったのだと思います。またたく間に環境省ばかりではなく、経済産業省、農水省、さらに多くの地方自治体が廃棄物処理対策や、あるいは地域振興のキーワードとして盛んに使ってくれるようになりました。国連大学を舞台にゼロエミッション活動を展開してきた私たちは、さらに活動を全国的に広げていきたいと考えまして、2000年4月にゼロエミッションフォーラムという組織を立ち上げて、今日に至っているわけでございます。したがって、94年にゼロエミッションという言葉が発想されて、2000年に1つの運動体としての組織ができ、今日に至ったということでございます。

この間、ゼロエミッションの概念も時代の変化に応じて大きく変わってまいりました。廃棄物の概念を拡大させて、地球温暖化の元凶であるCO₂という廃棄物をゼロに近づけるための低炭素社会づくりの実現、これも今やゼロエミッションフォーラムの非常に大きなターゲットになっております。この点についてはまた後ほど私の話の中でも触れさせていただくことになると思います。

千葉市の皆さん、ゼロエミッションの考え方をぜひ参考にさせていただいて、生き生きとした地域づくり、さらに地域の活性化に取り組んでいただければ非常にありがたいと思います。燃えるごみを3分の1にするというのもまさにゼロエミッションのコンセプトにかなう政策だと思います。

きょうこれから講演、その後のシンポジウムなどがありますが、よりよい千葉市をつくるために皆様の知恵を結集していただければありがたいと願いつつ、私のあいさつにかえさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

司会

主催者よりごあいさつ申し上げます。

それでは、引き続きまして、三橋先生に、第1部の基調講演1をお願いしたいと存じますが、その前に、舞台上の準備をさせていただきます。少々お待ちください。(舞台準備)

基調講演 1

司会

それでは、第 1 部、基調講演 1 の講師をお務めいただきます三橋先生を改めてご紹介させていただきます。

三橋先生は、日本経済新聞社 OB で、経済人と環境 NGO や NPO との交流を促進する一方、色々な大学で環境講座を開講し、経営者と学生との直接対話に道を開くなど、独自の立場から実践活動を続けていらっしゃいます。2000 年からは、千葉商科大学政策情報学部教授を務める一方、現在、環境省中央環境審議会委員、国連大学ゼロエミッションフォーラム自治体ネットワーク代表、全国地球温暖化防止活動推進センター（J C C C A）運営委員会議長などを兼任されております。

本日の講演テーマは、「循環型社会とゼロエミッション～新 3R の役割を考える～」です。

それでは、三橋先生、よろしく願いいたします。

三橋国連大学 ZEF 自治体ネットワーク代表

再度登板ということで、恐縮です。「循環型社会とゼロエミッション～新 3R の役割を考える～」ということについてこれからお話をさせていただきたいと思います。

40 分の予定でしたけれども、時間が少しずれ込んで、2 時 20 分には終えたいということなので、ちょっと話を速めに進めさせていただくということになると思いますけれども、ご容赦いただきたいと思います。

地球と人間は長い間良好な関係を維持してきた

長い間、自然界と人間は非常に良好な関係を維持し、仲良くつき合ってきました。大きな自然の中に人間社会が包まれて、自然のさまざまな恩恵を受けて、やってきました。人類の歴史は 500 万年ぐらい前にさかのぼることができますが、それからずっと今日まで、おそらく人類の歴史の 99% は自然と人間は非常に仲がよかったわけです。その関係が突然最近になって崩れてしまったということです。地球温暖化、酸性雨の、オゾン層の破壊などいろんな問題が起こってきて、地球と人間との折り合いが極端に悪くなってしまいました。なぜ悪くなってしまったのかということでございますけれども、それは、地球のサステナビリティが失われてしまったことが原因です。サステナビリティは持続可能性と訳されています。この地球のサステナビリティが失われてしまったために地球環境問題が起こってきたというふうにご理解ください。

これからの話しは、大体レジュメに沿ってお話ししますので、後でそれをごらんいただければと思います。

それでは、地球のサステナビリティと具体的にはどのようなことを意味しているのでしょうか。決して難しいことではありません。地球のサステナビリティとは、「健全な地球の営みを、過去から現在、そして未来へ、途絶えることなく引き継ぐこと」です。この何でもない当たり前のことが守られず、壊れてしまったため、環境問題が発生してしまったわけです。

サステナビリティを維持するための 3 条件

それでは、サステナビリティを維持していくためにはどのような条件が必要なのでしょうか。ここに書いてあるように少なくとも 3 つの条件が必要です。1 つは、地球有限性の認識です。地球は無限ではありません。資源は、使えば使うほど減少し、やがて底をついてしまいます。有害廃棄物を自然界に排出し続ければ、地球環境はどんどん悪化してしまふ。そういうことで、地球は有限な存在にもかかわらず、あたかも無限のように扱われました。有限な地球の下で、経済は成長し続け、世界の人口も右肩上がり増加し続け、自然の浄化力を超えて有害物質が排出され続けています。このようなやり方をしていれば、どこか

で破綻に突き当たることは当然です。しかし、現実の社会は、地球をあたかも無限の存在のように扱ってきました。その結果、地球のサステナビリティが失われてしまったわけです。有限な地球という前提に立って、経済活動、私たちの日常生活というものが営まれる必要があるわけです。

2番目が生態系の全体的な保全です。現在私たちが生きていくために必要なきれいな空気、きれいな水、適正な温度、これは生態系が存在することによって初めて守られているわけです。生態系が壊れてしまうと、きれいな水、きれいな空気、それから適正な温度、私たちが生きていくために適正な温度、これは壊れてしまいます。今の地球温暖化の有力な原因のひとつが生態系の破壊に起因しているわけです。したがって、私たちは生態系の全体的な保全に取り組まなければなりません。

それから、3番目は、未来世代への利益配慮です。まだ生まれてきていない私たちの孫、またその孫の孫というような未来世代も私たちと同様に地球のさまざまな恩恵が得られるように、健全な地球を残していかなければなりません。現在私たちが豊かで便利な生活をするために資源をどんどん使い、自然環境をどんどん破壊する、その結果、私たちの未来世代が資源の乏しい、汚れた地球を引き継ぐようなことは、人間として許されるべきことではありません。やはり未来世代への利益配慮が必要です。アメリカ先住民の間には、7代先の子孫に現在の自分たちが享受している健全な自然を残さなければならないという教えが親から子、子から孫へと代々伝えられていたそうです。未来世代への利益配慮とは、そういうことです。

20世紀後半の膨張の時代がサステナビリティを壊してしまった

ところが、1950年から2000年、つまり20世紀の後半の半世紀、膨張の時代と言われていますが、世界経済は爆発的に拡大いたしました。たとえば、1950年の世界人口は25億人だったのが、わずか50年後の2000年には61億人に、2.4倍も増えてしまう。GDPも、世界GDPが3.8兆ドルだったのが、8.1倍、30兆ドルにも増えてしまう。このような形で、1950年から2000年の、ごく最近の半世紀の膨張の時代を経て、地球の限界があらわになってきたわけです。

小麦についても、1950年には1.4億トン、それが2000年に5.8億トン、もうこれで地球の使える穀物生産の農地はもうぎりぎりです。これ以上人口がどんどん増えれば、とても食糧は賅い切れなくなってしまう。この膨張の時代を経て、さまざまな環境破壊が起きてきました。温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨、いろいろあります。最近では、異常気象、海面水位の上昇などのさまざまな環境破壊が起きて私たち人類の生存条件を脅かしているわけです。

環境破壊がどんどん進むだけではごさいません。地球にある資源も今どんどん減ってきています。この図は、地下資源を100として、既に発掘されて使われてしまった資源の量を黒印で表現しているわけです。これを見ると明らかなように、地球資源のうち、例えば、水銀とか、銀とか、スズとか、鉛とか、金とか、黒棒が長いところは、もう地下にほとんど資源はなくなっています。発掘して、使ってしまったわけです。銅も、大体50%ぐらいが使われています。無限にあると言われている鉄も、30%ぐらいが使われてしまっています。現在、銅とか鉄などの資源消費量は非常に増えていますから、今のままのテンポで使えば、おそらく今世紀の半ば、2050年ぐらいには、枯渇してしまうおそれがあります。そういうことで、今や膨張の時代を経て、地球の限界が非常に明らかになってきたわけです。

自然満足度曲線で見ると地球の限界

現在私たちが置かれている歴史的状況を認識するためのグラフがここに示した、自然満足度曲線です。縦軸に社会的厚生（生活の満足度）、横軸が自然の利用となっています。0点は自然がまったく利用されていない状態、逆にD点は自然が100%利用されつくした

状態で、社会的厚生はともにゼロ。B点は、自然の環境許容限度です。B点を境にして、自然満足度曲線の方向が変わってきます。B点の左側の世界は、自然を利用すればするほど社会的厚生、別の言葉でいえば生活の満足度は高くなっていきます。自然満足度曲線は、右肩上がりです。しかしながら、B点の右側の世界だと、自然を利用すればするほど満足度はどんどん落ちていきます。これが自然満足度曲線です。繰り返しますが、B点の左側の世界は、自然を利用すればするほど社会的厚生、生活の満足度はどんどん上がって行くわけです。自然を切り開いて道路をつくったり、鉄道を敷いたり、あるいは工場をつくったり、住宅をつくったりすることで生活の利便性が急速に高まります。また、自然界に存在するさまざまな資源を使って自動車をつくったり、家電製品をつくったり、家具をつくったりするほど、生活の満足度は上がって行くわけです。

しかし、自然は利用すればするほどどこまでも満足度が向上するわけではありません。環境許容限度を超えて過剰に自然を利用するようになれば、満足度は逆にどんどん落ちてしまいます。

現在私たちはこのC点の近くにいるというふうに考えられます。このC点の満足度、W1というのは、Bの上の満足度、W0より低くなっています。なぜこういう現象が起こるのかというと、B点の右側の世界ではすでに自然は過剰消費されているわけです。その結果、様々な公害が発生します。地球規模の環境破壊も起こってきます。温暖化、オゾン層破壊、酸性雨の発生などがその具体例です。さらに私たちの気持ちを癒してくれる森も今どんどん減少しています。そういうマイナスの相乗効果として、C点の近傍では、満足度がどんどん落ちてきているわけです。したがって、もうこれ以上自然を過剰にどんどん利用しても、社会的厚生は向上しません。私たちは、これからはこのC点近傍で生活をしているのだという前提で、経済活動をしたり、日常生活を送ることが必要になってくるわけです。

フローとストックの関係

電通PRセンターが作成した戦略10訓があります。B点の左側の世界の雰囲気が見ごとに表現されています。自然をできるだけ速やかに利用することで、社会的厚生、生活の満足度を高めることができた時代の空気が分かります。むだ使いを奨励し、資源を浪費することが経済成長を高めるために必要だった時代です。もっと使わせろ、捨てさせろ、むだ使いさせろなど10項が挙げられています。膨張の時代はまさにこういう考え方で実現したわけでございます。

B点の右側の世界は、戦略10訓ではやっていけません。逆に新しい戦略5訓、足を知る、大事に使う、資源生産性を高めよう、流行を追うな、自然のリズムを尊重せよなどです。春になれば食べられるイチゴを温室で促成栽培して冬に食べれば、膨大なエネルギーが必要になります。春、自然に育ったイチゴを食べればいいのです。そういうようなことで自然のリズムを尊重していくことがこれから必要になってきているわけです。

次に循環型社会を説明したいと思いますがその前に、ちょっと回り道になりますけれど経済学の言葉を2つだけ覚えてください。1つはフローという言葉です。フローとは、一定期間、例えば1年間に新たに作り出された付加価値の合計のことです。GDP（国内総生産）はフローを代表する経済指標です。もう一つがストックという言葉です。一定時点に存在する経済財の存在量のことです。フローとストックの間には非常に密接な関係があります。フローの一部が翌年のストックに積み増されるという関係です。住宅を考えてみましょう。ある年の住宅のフローは、 $A+C1$ 、これはその年に新たにできた新築住宅です。それから、 $B+C2$ というのは、既に過去から存在している住宅の数です。それでは、翌年の住宅はどうなるのでしょうか。C1とC2を除いた $A+B$ が翌年の新ストック、住宅の総数になるわけです。C1、C2は、その年に火災や洪水などでなくなってしまった住宅の数。その部分を引くわけです。

さて、この図をごらんください。戦後の日本を頭に浮かべていただきたいと思います。戦後の日本は、戦争でストックが大幅に破壊されてしまいました。工場、鉄道、道路、一般住宅、あらゆるものが戦争で灰になってしまったわけです。したがって、戦後の日本はストックが非常に不足した経済だったわけです。不足しているストックを増やすためには新しい製品や住宅をどんどんつくる、別の言い方をすれば、フローを大幅に増やす必要があったわけです。フローを増やすということはGDPを増やすということであり、GDPを増やすためには、高度成長政策が必要になります。そのための方法が、大量生産、大量消費、大量廃棄とワンウェイ型（一方通行型）の経済システムです。戦後の日本が高度成長政策を追求してきたのは、ストック不足を補うため、フローを短期間に増やす必要があったためです。

そのお陰で、今の日本は、地球の限界には直面しているものの、ストックが非常に充実した社会になっています。もう新品の製品をどんどんつくる必要はありません。先ほどの自然満足度曲線にストックの考え方を加えたのがこの図です。この黄色い部分がストックです。B点の左側の世界では、ストックが非常に不足していたので、大量生産によってどんどんフローを増やす必要があったわけです。しかし、B点の右側の世界では、黄色い部分、ストックが非常に充実しています。したがって、フローとしての新品をどんどんつくる必要はありません。

ストック重視の経済へ転換

これからの時代、つまりB点の右側の世界では、ストックを有効に活用することで成り立つ新しい経済をつくっていく必要があるわけです。すでに存在している既存の製品をできるだけ長く使っていくことで成り立つ経済です。B点の左側は、新品をどんどんつくることで成り立つ経済だったわけです。当然投入資源、エネルギーが多くなる経済です。この違いをぜひご理解いただきたいと思います。

ストックをうまく活用していく社会が循環型社会にほかならないわけです。ストックを有効に活用する方法として、資源生産性を向上させることが必要です。資源生産性とは、最小の資源投入で最大のアウトプット（製品やサービス）を生み出すことです。この表で、資源生産性を高める方法が1から10まで挙げられています。例えば、大量生産・大量消費・大量廃棄という経済システムを改めて、適正生産・適正消費・ゼロエミッションという、いわば円形、丸い形、あるいは循環型の経済システムに作り変えることによって、ストックを有効に活用することができます。

3R（リデュース、リユース、リサイクル）もストックを有効に活用するための非常に好ましい1つの手段です。重厚長大型の技術を軽薄短小型の技術に切りかえていく、あるいは使い捨て商品をやめて、できるだけ長寿命商品、長持ちする商品をつくっていく。こういうような形でストックを有効に活用していくことによって成り立つ経済がこれからは必要になります。

製品のライフサイクルから見た新3R

ストックを有効に活用するというのは、資源節約型、あるいは循環型社会に向けたアプローチにほかなりません。そこで、ストックの有効活用という視点から、新3Rという新しい概念を提案したいと思います。なぜ3Rではなくて、「新」がつくかということ、現在環境省、あるいは多くの地方自治体に取り組んでいる3Rというのは、廃棄物になった製品の有効活用という問題意識からスタートしています。それに対して、私の提案する新3Rは、製品のライフサイクル全体で3Rを実践すべきだという新しい提案であるわけです。

製品のライフサイクルという場合、原材料を調達して、製品をつくる段階、それを流通・消費・使用する段階、廃棄物になった製品を素材ごとに分解し再資源化する段階の3つのステージがあります。製品をつくる段階が上流です。上流段階で一番必要なことはリデュースです。必要なもの以外はつくらないということです。上流ですぐごみになってしまう

ような、むだな製品をどんどんつくれば、下流でいくらリサイクルしたとしてもごみは減りません。上流の製造業はB点の左側の世界で行ってきたような見込み、大量生産方式を止め、注文生産に近い生産方式に転換していくことが必要です。中流段階の流通・消費・使用段階では、リユースに力を入れなければなりません。ストック製品をできるだけ長く使うリユースがポイントになってきます。下流段階ではリサイクル、これはもう皆さんご承知のように、廃棄物になった後、それを解体・分解して、素材を取り出して、また新製品のための原料として使っていくことが求められます。製品のライフサイクルで3Rを考えていくというのが新3Rです。下流段階の3Rとはそこが大きく違います。

上流の製造業段階でのリデュースについて、考えてみましょう。B点の左側の世界では、ベルトコンベアを使って、見込み生産で大量に製品をつくっていたわけです。大量につくった製品が売れなければ、製品在庫となりその大部分はごみとして捨てられてしまいます。資源の浪費にほかなりません。これからの製造業は、適正生産に徹することが必要です。適正生産とは、必要なものしかつくらないということです。いわば注文生産です。注文に応じて物をつくっていれば製品在庫が出ることもありません。注文生産に対応した生産方法として、セル生産方式があります。今製造業でどんどん取り入れられています。セルというのは、英語で細胞という意味ですね。1人から5人ぐらいの小さなチームをつくり、そのチームが必要な数の製品をつくる方式です。この生産方式のことをセル生産方式と呼んでいます。

これはキヤノンの例です。キヤノンは98年から2001年の4年間にかけて世界で約45ある工場からベルトコンベアをすべて撤廃し、セル生産方式に切りかえました。その結果、4年間で、ここに書いてあるような大きな成果が上がったわけです。生産性も35%上がって、コストダウンが1,188億円、CO₂の削減も大幅に実現できました。1万8,000人の労働力が不要になりました。ただ、キヤノンの場合には、こうして浮いた余剰人員を同社の別の部門で働いてもらうため、「活人」という言葉を使っています。そういう形で、大量生産方式をセル生産方式に切りかえることによってキヤノンでは増収・増益をずっと続けることができたわけです。今回のアメリカ発の金融危機の中で、さすがに売り上げも利益も落ちていますが、それは別の要因によるものです。

次にストック活用の中流対策。ここではもう徹底的に経済のサービス化が必要になってきます。修理、リフォーム、中古市場、いろいろ書いてありますね。こういうような形で、製品の中流対策としては徹底的にリユースを図っていく。ESCO(エネルギーサービス会社)もまさにリユースの典型的なビジネスと言えるでしょう。

それから、日本の自動車市場について説明しておきます。日本の自動車は、大体売り上げベースで35兆円の産業です。このうち新車の売り上げというのは実は31%ぐらいしかありません。残りの7割が実はサービスの売り上げです。アフターサービスというのは、自動車修理、中古車、それから自動車保険、こういったもので実は日本の自動車産業の7割を占めています。つまり、日本の自動車産業はサービス産業の売り上げで支えられているということになるわけです。それは、次の数字を見れば明らかです。ストックとしての自動車は現在日本で7,000万台あります。1年間に廃車される自動車の数は大体500万台。年間の新車販売台数というのは大体550万台。そうすると、550万台から廃車される500万台を引くと、新規需要は50万台しかありません。日本の場合には、新車は廃車の買い換え需要が中心です。日本の自動車産業は今やストックとして存在する約7,000万台の車の修理とか、中古市場での売り上げとか、自動車保険とか、そういうもので成り立っているわけです。それはリユースがどんどん進んでいることの結果でもあるわけです。そういうことで、リユースというのが中流段階では非常に重要になってきているということです。

それから、製品の下流段階、これはリユース、リサイクル、ゼロエミッションというようなことですね。これはもう皆さんご存じだし、また千葉市でも取り組んでいる3Rのこと

です。

CO₂有料時代がやってくる

ストック活用時代の地域社会については、地産地消とか、分散型エネルギーの活用とか、廃棄物の地域循環というようなことが考えられるわけです。またストック活用時代の消費者にとっては、グリーンコンシューマーへの転換が必要ですね。必要なものを必要な量だけ買うとか、長持ちする製品を選ぶとか、過剰包装を避けるとか、いろいろありますね。そういうような形で貢献していくということになると思います。

最後に、これからはCO₂という最大の廃棄物をどうするかということが大きな問題になってきているわけです。通常の廃棄物とは違って、CO₂は大体100日から120日ぐらいで世界を一周するというふうに言われています。したがって、日本国内だけで努力しても限界がありますが、このCO₂という最大の廃棄物に対しては、私たちはお金を払うことによってCO₂の排出量を削減していくという時代を迎えたと思います。CO₂有料時代の到来です。国が行うCO₂の有料化としては環境税、また企業ベースでは、例えばCO₂の排出権取引、キャップ・アンド・トレード方式などがあります。また私たち個人ベースでは、カーボンオフセットという考え方もあります。自分の日常の行動で排出するCO₂に対しては、何らかの形でそれを相殺する行動をする。場合によっては相殺するためのお金を払う、これがカーボンオフセットです。

私たちが生きていくために1年間にCO₂をどのくらい排出しているかということCO₂換算で大体320キログラムです。これを、例えばヨーロッパのCO₂取引の価格を参考にして、1トン当たり2,000円で換算すると、640円ぐらいになります。したがって、国民1人当たりが年間640円のお金を払うことによって、例えば植林をするということにお金を使うことで、自分が生きていくために排出したCO₂を相殺することができるわけです。日本国民全体だと年間820億円ぐらい。これを植林すれば結構CO₂を吸収できます。

このパネルに「未来駅」と書いてありますね。「2050年までに、世界の温室効果ガスの排出量を現在の半分にしなければならない、というのが世界の合意です。これに成功しないと、人為的に気候変動を制御できなくなるとされています。そこで、「2050年駅」へ向かうためには、CO₂の排出量を削減するためのコストを乗客である私たちは支払わなければなりません。そのためには、CO₂有料時代という新しい価値観を地球列車のすべての乗客が共有する必要があります。ただ乗りを認めてはいけません。どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)

司会

三橋先生にご講演をいただきました。どうぞ皆様、いま一度大きな拍手をお送りください。先生、ありがとうございました。(拍手)

大変興味深いお話をしていただきました。お時間に限りがあったのが大変残念でございます。

さて、それでは、続きまして、シンガー・ソングライターの白井貴子さんによります基調講演に移りたいと思いますが、その前にステージの準備をさせていただきます。今しばらくお待ちください。(ステージ準備)

基調講演 2

司会

さて、講演者の白井貴子さんについては、この会場にもファンの方がたくさんいらっしゃると思います。準備の間に、白井貴子さんについてご紹介をさせていただきます。

白井さんは、神奈川県藤沢市出身で、フェリス女学院短期大学音楽科を卒業され、1981年にデビューされました。1984年、「CHANCE!」のヒットを機に、ロックの女王と呼ばれ、女性ポップロックシンガーの先駆者的な存在となりました。1988年にロンドンへ移住。1990年に帰国され、ロンドンで感動、体得したオーガニックな、地球環境を配慮した生活を現在も実践されております。2007年には、神奈川県環境大使および環境省 3R 推進マイスターに任命されました。また、今年2月には、20年ぶりのニューアルバム「地球～HOSHI～」を発表、グリーンエネルギー「カーボンオフセット」を導入したライブを開催するなど、ロックとエコのハイブリッドなミュージシャンとして現在ご活躍中です。

そして、今日は、白井さんのお話の後には、千葉市花見川区を拠点に活動をしているタンポポ児童合唱団とのミニコンサートがあります。今回のミニコンサートにつきましては、講演の中で千葉市の子供たちと一緒に歌を歌ってもらえますかという市からの提案にご快諾をいただいたものです。曲は全3曲です。白井さんの持ち歌「CHANCE!」に続き、童謡の「里の秋」、そしてイルカさんの「まあるいいのち」と続きます。

それでは、舞台の準備が整ったようでございます。お待たせいたしました。それでは、白井貴子さんにご登場を願います。白井さん、お願いいたします。本日の講演のテーマは、「地球と仲良くね!」です。お願いいたします。

白井貴子 氏

どうも、皆さん、こんにちは。青空が大好きな珍しいロック歌手、白井貴子です。

今日は、ほんとうに、そんなキャッチフレーズと同じような、秋晴れの、すごい青空の日なんですけれども、ごみのことをみんなで考えましょうという大切な1日にわざわざ集まっていたいて、ほんとうにうれしく思っています。どうもありがとうございます。

前の先生の時間をすごく短くさせてしまって、私、申しわけないなんですけれども、ちょっとその分頑張ってお話したいと思っております。よろしくお願ひします。

楽器が置いてあるから、思わず、こんな感じだと弾き語りか何かしたくなっちゃうようなところで何なんですけど、一応、千葉市用の台本を書いてきましたけど……。

私は、出身は神奈川県藤沢なんですけれども、この三、四年、もったかな、四、五年になるのでしょうか、千葉の皆さんとはほんとうに仲良くさせてもらっているんです。というのは、bayfmの「ミュージックサラダ」というラジオを佐倉市のユーカリが丘というところでずっとやっていました。毎週、生放送のために、東京を通り越して、往復5時間ぐらい電車に乗って神奈川から千葉まで来て生放送をしていたんですけど、そのご縁で、佐倉の町もすごく城下町でとてもいいところですので、何か楽しい人たち多そうだな、なんて思って、地産地消じゃないですけど、地元のお宝に巡り合いたいと思って、いろんな方々のところへ行っていたんですけど、お味噌蔵を見学したり、お米屋さんに行ったり、田んぼを見にいったりとか、あと、ピオトープという、自然の循環する、動物とか草花が生い茂るようなつくり方をしているお庭や田んぼに行ったりとか、見学をさせてもらいました。そういうすごいいいところもあるかと思ったら、反対に、千葉には大問題があるというふうに聞いて、それが印旛沼だったんですね。今はどうなんでしょうか、印旛沼、ワースト幾つぐらいになったのかな。ちょっとでもその成績が下がっていらいいなと思うんですけど、私がラジオをやらせてもらっていたころには、たしかワースト3かなんかに入るときだったと思います。なので、「じゃ、ちょっとでもその数字が下がるといいですよ

ね、何かできることあったら考えましょう」なんていうふうな話がラジオで盛り上がったとか、そんなことを2年ぐらいやらせてもらいました。なので、それ以来ずっと仲良くしてもらって、この夏も佐倉でライブをやってきましたし、ほぼ毎年千葉には来させてもらっています。そんなご縁をいただいて……。

もうほんとう、千葉は、広い土地と、海と、温泉はあるし、外国へ行こうと思ったらめちゃくちゃ近いし、ディズニーランドもあるし、東京にも近いしという、何か、もう三拍子も四拍子もそろっているすごいところだなんていつも感動しているんですけども、そんな、この場所のお宝が少しでもなくならないように、輝き続けるように、そんなことを思いながらお話ししていけたらいいなと思います。

私は、今は3R推進マイスターと同時に、神奈川県環境大使もやらせてもらっています。それも初の。神奈川県人は、どうやら初物好きだそうで、何でも最初に「初」しちゃう。だから私もロックの女王なんていって走っちゃったのかなと思うのですけれども、多分、その昔で言ったら、カレーを最初につくったりとか、何かいろんな、そういう遺伝子があるのかな。で、「初」はいいんですけど、環境大使で初というのはね、よくよく考えると、格好いいようで、結構格好悪いか、なんて思ったりもするんですよね、まじめな話。そういう環境のことを言わなきゃいけなくなってしまったから環境大使なんてつくることになってしまったんであって、そこに私が最初に就任させてもらって、まあ、うれしいような、悲しいような、という感じなんですけど、でも、自分のやれるだけのことをやろうなんて思って、きのうも、名古屋のほうでやっぱりごみ減らし運動の、同じような会に行ってきました。

私、名古屋と言えば、話はぼんぼん各地に飛んでしまいますけど、小学校4年生のとき、1年間だけ名古屋に住んでいたんですよ。それでね、三つ子の魂じゃないですけど、ティーンエイジャーのころ、ロックミュージック、ビートルズとか、ローリングストーンズとか、デビッド・ボウイとか、TREXとかって、イングランドの音楽をいっぱい吸い取って、自分でやれる女の子のロックをつくらうと言って80年代駆けだした私ですけども、昔からやっぱりちょっと変なところがあったみたいで、4年生のころのことをすごい思い出したんですね。

4年生のときに、すごい忘れられない思い出が幾つもあって、名古屋の市内の、結構街中にいたんですけども、すごい暑いときがあったんですよ。なんかもう、おかしいぞと。「おかしい、おかしい、お母さん、暑くておかしいよ」と言っているんだけど、周りは全然見向きもしてくれなくて、私はほんとうにおかしいと思ったのね。何を思ったか、家から温度計を取り出して、ダダダダッと外へ出て、庭先にブランコがあったんですけど、そのブランコにずっと座りながら、夕方の太陽に向かって温度計をずっとこうやって、一体何度まで上がるかというのをチェックしてたという、それで、38度まで来て、「ほらね、ほらね、暑いでしょう？ ほら、ほら、あっ、40度に上がった！」とか言って、もうすごい、私の感じたものは正しいんだ、みたいな感じで、一生懸命はかった思い出があって、何でそんなことしたのかな……。だけれども、その後がだめですね。白井貴子、詰めが甘いというか。じゃ、そういうふうに40度に上がったことがなぜなのかというのを研究しようとか、勉強しようとか、もっと科学的な目をもっていけば、今ごろもしかしたら元副大統領のゴアさんの横に並んでいたかなとかって思ったりもしないではないんですけど、意外と、40度に上がったので納得しまして、そのまま安心して——安心というか、何か、母とか、やっぱり自分の感覚は正しいなんて自分に太鼓判を押して部屋に戻った記憶があるんですよね。

ロックの女王というので、ミニスカートをいきなりはき始めてライブをやったんですけども、そのころも、デビューの当時は、かなり名だたる、すごい有名なミュージシャンが来てくれて、レコーディングをしました。わあ、あの人だ、あの人だって感じで、びっ

くりして、それですごいいいレコードができて、そして今度また自分のライブをやろうというときに、そういう有名なミュージシャンが自分のライブをやってくれるのかと思ったら、全然とんでもなくて、そんなこと言っても高く、すぐつぶれちゃうという感じで…。まあ、じゃ、若手でいこうということで、若いミュージシャン、まあ、同じぐらいのミュージシャンでバンドをやっていたんですけども、結局、デビューのころ、私はレコーディングと自分のライブのときのリハーサルと同じ思いを二度にわたって言わなきゃいけないかったですね。例えば、イントロを4小節にしてくださいとか、エンディングはGで終わってくださいとか、レコーディングのスタジオでも同じ思いを言って、そしてバンドに帰っても、ライブバンドでもライブバンドと同じことを言うというのはどうも何か労力のむだだなというふうに思っ。結構ほかのアーティストはみんな当たり前にそれやっていたんですけど、どう考えても、何かすべて時間のむだだというふうに、もったいないと思って、まあ、もともとバンド人間なので、じゃ、自分の思うような、ビートルズみたいな男の子が結構わいわい飛び跳ねているような、そういう楽しいロックバンドをつくらうなんて思って、貴子& THE CRAZY BOYS というバンドをつくったりなんかしました。

この間、実は25周年で——でも、そう、私、自分のデビューの日なんですよ。まあ、こんなときに……。 (拍手) すみません。わざわざ拍手もらっちゃいます。ありがとうございます。11月1日が、実は27年目に入ったんですけど。25周年が2年前にありまして、そのときも、あ、そうだと思って、そのころはいてた、結構大好きなジーンズのミニスカートがあったんですけど、普通は、もう衣装はどんどん新しくしていくというのが80年代、90年代なんか当たり前ですから、今でも当たり前かもしれないんですけど、そんな中、すごいお気に入りのスカートだったから、ずっと取ってあったんですよ。まあ、はけるとは思っていなかったんですけど、でも、ちょっと恐る恐るダンスの奥から取り出して、そのスカートがはけるかどうかやってみたんですよ。はけたと思います？ ぐっとはいて、ぐっぐぐぐと上げていったんですけど、最後のチャックを上げるときは結構ドキドキものだったんですけどもね、どうにか入りまして、つい2年前も、20代のときに大好きだったスカートをまたバンド復活ではいたりなんかしました。やっぱり長く大切にするというのはいいものだなあって思いますし、物には愛着じゃないですけど、そのときのことがばあっと思い出されて、私はほんとうに大好きなものは捨てられないほうなんですよね。

それで、きょうはいろいろ持ってきましたけど、1つ私のお宝を、そういう捨てられないものの1つで。この間、実家で母が、部屋の掃除をするというので、「あなた、これどうする？ もう要らないんだったら捨てちゃうわよ」って言われたのが実はこれなんです。懐かしい。こういうのを見せると何か年がばれちゃうんですけど、私が幼稚園のときに母がこのお弁当箱に詰めてくれて、いつもお弁当を持っていったアルミのお弁当箱で、これも母が、私以上にもったいない大王で、捨てないでとってあったんですけど、まあ、そのおかげで今私の手元にカムバックしてきたという感じで、すごい、何かこのときのことを思うと……。またこのお弁当箱を持っていたころは九州にいたんですよ。私の父が転勤の多い会社で、いっぱい母がおかずを入れてくれるんですけども、どういうわけか、そのころ私はおかずをあまり食べない子で、必ず先生からごま塩をもらって、御飯だけ食べて帰ってきたという……。それでいつも母に怒られていたことを、何かこのお弁当箱を見たときに思い出したんです。

それから、これはついこの間復活したんですけど、後ろに「しの」って書いてありますけれども、近くの人しか見れないと思いますが、私の父のほうのおばあちゃんが彫った鎌倉彫なんです。これも、実家で、もうオレンジ色になって、何かすごく汚くなっている、もう今にもごみ箱行きという感じだったんですよ。だけど、私は今鎌倉に住んでいるんですけどもね、何人か鎌倉彫のお店の方とも仲良くなって、あ、そうだと思って、思い出して、これを持っていったんです、すごい汚かったときに。そうしたら、もう見た途端に、

「ああ、これはもう新品のようにきれいになりますよ」って言ってくれて、それで1週間後に、こんなつつつとした美しい鎌倉彫にまたなって、私の元に戻ってというか、おばあちゃんの形見が戻ってきました。

こんなので、これも危うく今ごろ埋立地に行っていたかもしれないんですけど、よかつたなという。きつとごみの中にはそういうものもいっぱいあるし、反対に、もう20年前に捨てておけばよかつたというものもあるかもしれませんが、そんなので、私は何か、こういう生活雑貨が特に好きなので、すごく大切にしています。

そんな、もともとアンティークというか、古いものが大好きなのだったからだとは思いますが、ロック界で、馬車馬のように駆けて、もう次は大ヒット、次は大ヒットって、こぶしをどんどん振り上げて、80年代は私、頑張っていたんですけど、どう走ってもこれ以上無理だよというぐらい体力の限界を感じたというか、20代のくせに、もうすごいくたくたに疲れちゃったときがあったんです。その時代は、今はそれこそ30になっても40になっても、例えば頑張っている女の人はそんなこと言われることないですけど、まだ25年前の日本って、25を過ぎたらお肌の曲がり角とかね、二十七、八になったら、とんとん、「どうするの？」って肩たたかれるような感じで、「結婚するの、しないの？」みたいなね、周囲から何かそういう目で見られるみたいな、そういう時代だったんですよ。

そういう時代にもかかわらず、私はもっともっと音楽を生み出したらうまくいくはずだと言って頑張ろうとしている自分がいるのという、周りの目と私の思いというのがもう全然違ったときがあったんです。それで、スタッフのほうは、CDが5万枚売れて、10万枚売れてと私が喜んでいる中、さらに15万枚、20万枚、30万枚というふうに、もう際限なくゼロが当たり前についていくわけですね。そんなときに、男の人は体力持つからいいかもしれないけど、もう女は無理だと。で、鏡の前に行ったら、クマがもう何匹も顔にいる、じゃないけど、すごくぼろぼろに疲れていて、「こんな私にどこまで走れと言うの？」という感じで、鏡を見ては悲しくなり、何かこう、CDのセールスの結果を見ては、ああ、だめだったって落胆したりとか。そういうふうになってしまうことが、あ、自分の曲が悪いから売れないのかなとか、もっともっと周りが大宣伝してくれないからだめなのよって、人にも自分にも文句を言ってしまっ、ぼろぼろになっちゃったときがあったんです。それがちょうど28ぐらいだったんですけど。

そして、そんなときに、たまたまロンドンにレコーディングに行っていて、写真撮影に出たんですけど、その私の足元に、青空を見て凜と、楽しそうに笑顔で咲いている一輪の花、野生のマーガレットに出会ったんです。元気だったらきっと踏んづけて歩いちゃっていたかもしれないんですけど、そのあまりにも朗らかに天を向いて楽しそうに生きている花に出会って、何かこう、少女時代の自分、あの温度計を太陽にかざしていた自分じゃないけど、そういう天真爛漫な、自分の感性のままに生きていた自分がそこに咲いているような気がして、あ、私はこういうふう生きていなかったから人に対して文句を言い、自分にも何か不満を言いながら生きてしまったんだというふうに、花に教えてもらって、あ、一度しかない人生だし、自分はもうこういう原石を持っているんだから、その原石を磨くように生きていけばきっと自分も楽しく生きられて、その楽しく生きている自分を見て周りも喜んでくれるに違いないというふうに、何かピンと思っ、教えてもらって、それまでのやり方がほんとうに、もうゼロが際限なくついていって、とめどもない、要は、大量生産・大量消費じゃないですけど、こっちは生身の人間で、思いを込めて一生懸命曲をつくるんですけど、売れないという結果が出たら、もうすぐに生産停止、それからレコード店なんかにもう注文が来ないですから、いきなりパタッとストップして、そしてレコード会社に在庫が残り、CDがごみになっていくわけですね。

まあ、余談というか、大切なことですが、最近やっとなそのCDも、80年代や90年代はバンバン売れ残ってしまった、チャート競争の中売れ残ったCDはごみになっていたんで

すけれども、最近私がずっとお世話になってきたソニーのほうでも、やっと CD が在庫になっちゃったら、それがまた CD に戻るように、やっと循環されるようになってきたんですね。その工場も私、静岡へ行って見てきましたけれども、まあ、皮肉なことに、私が 80 年代にすごい、思い切り頑張っ、こぶしを上げていたときの CD を、当時はレコードですが、レコードをいっぱいつくっていた工場が、そのまま CD のリサイクル工場になっていましたね。ですから、何かもう、皮肉なものだなというね、何かこう、「猿の惑星」を見るような、というんですかね、1 周地球を回ってきたら、ああ、こんなになってた、みたいな、ソニーの工場へ行ったときにそんなふうな気持ちになりましたね。

これからが本題という感じなんですけど、それで私、自分の大好きな音楽を愛し過ぎていのかなんて。もうちょっと何かビジネスとしてもライトな気持ちでできなかったらプロじゃないんだろうかという、いろんな悩みがあったので、その頭を冷ますためにもお休みが必要だということで、ロンドンに行きました。それが 88 年、野生のマーガレットを見て、その 1 年後ぐらいだったんですけれども、2 年間暮らして、もう野生のマーガレットのような生き方を一からやり直してどこかで思っていたので、ちょっとでも自然を愛するというか、大地のエネルギーをもらうために、無農薬農法の野菜をいっぱいとりまようとか、ちょっと、いわゆるベジタリアンにもトライしたんですけど、ベジタリアン、私はだめだったですね。もう何か、お肉を食べなくて 1 週間ぐらいしたら、精神のベクトルというか、幹がこっちへヒューって行っているような感じで、ああ、これはやばいと思って、ちゃんとウシさん、ブタさんというか、肉のエネルギーももらわないといけないんだなというふうに、もう一回自分を立て直して。そういうときに、ほんとう、動物の力ももらっているということもひしひしと自分で体感できたような気がするんですけれども、まあ、そんな、一からやり直して、ちょっとでもミニマムな、自然と呼吸するような生き方に変えていこうというふうに過ごしたロンドンだったんですが、2 年間、そんな生活を終えて、また都内に戻ってきました。

なるべくはそういうチャート競争の中に入りたくないという思いと、また反面、まだまだ自分には、いい曲を書けば、きっと絶対に多くの人に愛してもらえるビッグヒットが生まれるはずだという夢もやっぱりまだどこかにあって、両方てんびんにかけるように大手の事務所に所属していたんですけれども、そんな生活の中、事務所が青山だったんですけど、多くのアーティストがタクシーでいろいろなところへ行く中、私はもう自転車を買って、ダイエットも兼ねて、青山まで自転車に乗っていったりとか、そんなこともやったりしたんですけど、ごみの日に、四つ角のところのごみ置場に捨てに行くんですけれども、ぱっと捨てに行ったら、まだまだ使えそうな電化製品とか、テーブルとか、座布団とか、洋服も袋に詰めてあって、しかも洋服も、ぐしゃぐしゃの洋服だったら、ああ、ごみなんだなって見たらすぐわかるんですけど、きっとこの人、ダンスからそのまま一式全部袋に入れて捨てたでしょうという感じの、もうきれいにたたんである洋服がそのまま捨ててあったりする風景を見て、「これ、おかしいんじゃないの？」ってすごい思ったんですね。

というのは、ロンドン、ほんとう、アンティークとか古着という言い方で古いものをいっぱいばしばし売ってましたし、テーブルから何から。何より私が住んでいた家が、200 年前の、ビクトリアン時代の家なんですけど、そこを修復しながら住んでいて。そういう古いものを大切にす文化の中からいきなり日本に戻ってきて、何でもかんでも、まだまだ使えそうなものがいっぱい捨ててあったから、それ、おかしいな。「こういうことをしているから音楽のとらえ方もあんなになっちゃうのよ」なんて、また何かロックのこぶしがブーッと上がってきちゃって、冗談じゃない、みたいな。何かもう、ほんと、何かおかしいよという、そんな、ぶつぶつまた私の中で……。

それで、そのころ、まだ時は 90 年代で、まだまだ上へ上へという時代だったので、私が

ロンドンでいろいろつくってきた、すごくオーガニックな生活で、アンティークを大切にしながらなんていうふうに思っていた中でつくってきた曲が、もう焼け石に水だなんていうふうに思っていて、10曲ぐらいつくってきたんですけども、全部もうお蔵に入れて、もう一回この日本を見つめ直して曲をつくりましょう、なんて思ってやったんですけどもね、まあ、そんな中、私、2番目に私を変えてくれた大きな旅の機会をいただいたんです。それが、94年に「ウルルン滞在記」という、ついこの間終わってしまいましたけれども、あのテレビで、アフリカのセネガルへ行ってくれと言われて、もう私は、まだそのころ、ちょっとでも、よし、自分の中のヒットのために、いい曲のために、なんていうので、外に出る気持ちバシバシでしたから、手を挙げて、アフリカに行きました。

アフリカでは、ドウドウ・ンジャエ・ローズさんという、太鼓の王様と言われているお父さんのもとに1週間ホームステイをして、炎天下の中、太鼓をばあっと教えてもらったんですけど、もうそのお父さんか、もうほんとう、エネルギーの固まりの人で、ああ、なるほどな、なんて思っちゃったんですけども、太鼓がもうすごいんですね。イスラムの教えで許されているんですけども、4人の奥さんと、子供ももう数えられないぐらい、自分の子供を忘れちゃうぐらい子供がいっぱいいて、孫子の洗礼式が3日に一遍あるみたいな、もうすごいバイタリティー溢れるお父さんだったんです。でも、その家族形態がわかるという、すべてのお父さんのエネルギーがわかるような太鼓をバーツとたたいて、そうしたら、もう周りにどンドン人が集まってくるんですね。もう知らない間に、何も宣伝していないのに、太鼓さえたたけば、もう200人、300人って、どンドン人が集まってきて、楽しい大コンサートになっていたんです。その風景を見て、あ、こういうふうに音楽をやれば、もっともっと野生のマーガレットの、大地と仲良くする生き方ができるんだわ、なんて思って、帰ってきて、私はもうすぐに大きな芸能事務所をやめて、独立をして、今に至っているんですけども……。

そのアフリカの生活の中で何よりも感動したのは、大地の上で、みんなもう、子供から大人まで、いろんなものを手作りしていたんですね。自分たちの洋服はもちろんですし、森から木をもらってきて太鼓をつくって、その太鼓の残ったものでお皿をつくって、そして細い木でイスをつくって、テーブルをつくって。お母さんは白で脱穀をして、もうほんとうに、ああ、昔々の地球はこうだったんじゃないかという、ほんとうに原風景を見せてもらったような気がして。で、その奥のほうに、ものすごく大きなものをつくっている人たちがいたので、何をつくっているのかしらと思って近づいていったんですよ。そうしたら、それは棺桶だったんです。何か、普通の女の子だったら「ああ、怖い」とか何か思うのかな、どうなんでしょうね。私は、格好いいと思ったんですよ。自分の棺桶、自分でつくりたい、みたいな。何から何まで、生まれることから死ぬことまで、すべてが手作りで、何てすてきな生き方なんだろうって、ほんとう感動しました。

そういう生き方がちょっとでもまねできたらいいなと思って帰ってきて、その次にまた大きな旅でいただいたお仕事は、何といても「ひるどき日本列島」という番組です。多分、千葉にも私、何回か来たことあると思うんですけど、見てくれていた方いますか。忘れちゃったの？ なんて……。 (拍手) ありがとうございます。ちょっと前までは、よく、「昼どき」でよかったわねって言われていたんですけど、ここのところ、正直なところ、あまり言われませんね。テレビというのはすごいなと思いますけど、1日でもパーンとNHKとかに出ると、もうすごい、次の日、町を歩いていてもいろんな人に声かけられて。ちょっと出なくなると、もうほんとうに忘れられてという、この辺がマスメディアのすごさであり、怖さだなと思うのですけれども。あの旅で私はほんとうに地産地消の鏡というんですかね、地元の宝を自分の手で大切にしている方々のところに旅に行って、ほんとうにたくさん感動をいただいたんですね。

埼玉の草加せんべいの工場というか、お店があるところへ行ったときも、すごい手焼き

のおせんべいを一生懸命焼いているおじいちゃんがいて、格好いい白髪の。それで、四畳半ぐらいの小さなところで、炭火で焼いているんですけども、今は「ふるさと一番」という名前に変わっていますけれども、あの番組をやるのに、意外とスタッフがたくさんいて、よく、三、四人で撮っているんじゃないのって言われるんですけど、全然そうじゃなくて、いろんなカメラがありますので、総勢三、四十人かけて生放送が動いているんですね、何台もパスを出して。そのときも、四畳半の狭い部屋にたくさんのスタッフが配線を運んだり、カメラを運んだり、マイクを運んだりって、右往左往、もう大変な、きのうまでの家とは違うという感じで、たくさんの人が小さなお部屋を行ったり来たりしているんですけど、そのおじいちゃんは、だれが通ろうと全然見向きもしないで、ずっとこうやっておせんべいを焼き続けていたんですよ。「これがわしの仕事だ」みたいな感じで。それを見たときも、「うわっ、格好いい、このおじいちゃん、ロックだぜ」みたいな、すごい気合を感じて、びっくりさせられたことがありました。

それとか、最初の放送は、小笠原に行ったんですけども、小笠原で、2日目の日に、ホエールウォッチング、クジラを見ようということで、ザトウクジラを見にいきました。残念ながら、番組では見れなかったんですけども、電波テストで、その前々日に船を出して、それに私も乗せてもらったんですけど、ほんとう、私の遠く、100メートルぐらいのところまでクジラがバーンッと飛び跳ねたときには、もう思わず、そうですね、多分このホールの横ぐらいよりも長い、動物ですよ、こんな大きいのが私の目の前でドッカーンと来たときには、もうね、怖いのと、ありがとうと、見せてくれてサンキューと、いろんな気持ちが私に降りかかってというか、私に感動を与えてくれて、知らない間に手を合わせていたんですよ。「ほお〜」みたいな、「神様、お願いだ〜」みたいな感じになっちゃって、ほんとう、自然に対して手を合わせるような人じゃなかったんですけども、もうほんとう、大感動で、自然の驚異に恐れというんですかね、手を合わせるというのはこういう気持ちなのかというふうにクジラに教えてもらいました。

それとか、漁船に初めて乗って、あ、これがタチウオっていうのかというぐらいに、もうピンピカのきつれーなタチウオ、ほんとうに私、スーパーに、このぐらいで切った、それもちょっと黄色がはげたような、そういうのしか見たことがなかったんですよ。だから、もう、タチウオも、「えっ、私の顔、映るじゃない！」みたいな、それぐらいにきれいな……。だから、「タチ」って、ここからついたんだって、ほんとうにわかるような美しいタチウオに出会わせてもらったり、ほんとう、たくさんの地球からのエネルギー、感動をいただいて、どんどん自分の中で、地球を愛する、いつか地球から生まれてまた地球に戻っていくんだという、そういう自分が養われていったような気がするんですね。冷静になって考えてみると、ショック療法という感じですよ。

もう、ぜひ皆さんも、千葉も海がたくさんありますから、黒潮がきっと近くを流れていて、すばらしい場所がいっぱいあると思います。そうだと。1回千葉でも私、鮎子で、小笠原でホエールウォッチングで感動しちゃったのをいいことに、ホエールウォッチングしたいなんて言って船を出してもらって、そのときは波が荒くて行けなかったことがあったんですけども、ぜひそういう漁船に乗ってみたり、エコロジーツアー、佐倉もそうですし、千葉はいっぱいありますので、山に、海に、体験する場所、1回しかない人生ですからね、もうこのすばらしい地球のエネルギーを満喫して、そのすばらしさを楽しんでいただきたいと思います。

だんだんと時間がなくなってきてしまいましたけれども……。最後に、私、2つの話をぜひ話したいんですけども、もうあっちからギターの手音が聞こえてきたので、そろそろ……。

私、ラジオの取材で手島に行ったときのことが忘れられなくて、手島と言えば、瀬戸内海の、小豆島のちょっと手前のところですけども、そこはもう産業廃棄物の問題で大変な注目を浴びてしまったところですけど、その現地に私、取材にいきました。もうかな

り、捨てられてしまったごみのためにわざわざ大きな工場を建てて、ちゃんときれいな水とか、問題ないごみに戻していくように作業を進められていましたけれども、それでもまだ二山も三山も、ちゃんと処理をしていない、有毒なものがいっぱいまじっているごみが置いてあって、そのごみが外に流れ込まないように、分厚い鉄の柵がドーンと海を隔てて立っていたんですけれども、その柵の近くにたまっていた水、もうほんとうに忘れられないんですけれども、真っ黒黒で、インクをたらしたような、墨汁をそのままたらしたような、もうほんとうにすごい色の、普通の水とは思えないという、ごみからの汚水がたまっていて、ああ、私たちは今までそういう汚い水、ごみとか、すべてのエキス——今までじゃないですね、もしかしたら今もそうでしょう——汚いものがたくさん海に入り込んで、その水を命のかたににして大きくなっている魚を私たちがまたいただいて日々の生活があるんだということをものすごい感じたんですね。

ですから、漁師の皆さんも、ほんとうにもう死ぬ思いで一匹一匹の魚をとっているわけで、私はほんとうにそういうのを逐一いろんな取材で見せていただいて、これはもう私は自分だけの感動じゃなくて、ぜひこういった外に向かって伝えていかなきゃいけないんだわ、なんて、どんどん思いが強くなって。そんなことをずっとやっていたからでしょうかね、推進マイスターに呼んでいただいたり、環境大使をやらせてもらったりということにつながっているんだと思うのですが、ぜひ皆さんも、できるだけ自然と接する時間を増やしてもらって、そして、いいものも、汚いものも、悪いものも、全部結局は自分がいただいているんだということイメージしながらお台所に立ったり、スーパーに行ったりしてもらえたらなと思います。

20世紀の手島の負の遺産のような、もう、タイヤとか、パイプとか、車とか自転車とかがうずたかく積まれたごみの遺跡が3メートルぐらいになって、わざわざ残されていました。全部回収しないで、全部処理してしまわないで、これを後世に残していこうというので、もうほんとうに恥ずかしいやら何やら、手島の遠いところですけど、絶対自分のごみもここに入っているなというふうに私は確信しました。まあ、そんなので、ごみはたまる一方なんですけれども、捨てる場所はもう限りがありますから、ちょっとでもごみを少なくして、少しでも今の地球のごみを減らしていけたらなと思います。

最後に私、もう一つ、自分の宣伝のようになってちゃうんですけど、CDもいろいろリサイクル可能なビニールでパッケージしたりなんかもしていますけれども、最近、岐阜県の大垣市の皆さんと一緒にリサイクル陶器というのをつくりました。これ、プツプツプツって、黒い点々があるんですけど、それは、割れた食器とかが回収されて、一たんは粉になって、その粉が土に二、三十%まじっています。その昔は、もう5年ぐらい前から、GL21というリサイクル陶器の推進を進めて皆さん頑張っているんですけど、5年前にはまだまだ、プツプツ鉄粉の粉が入っていると、これは不良品だと言って戻ってきたらしいんですよ。でもね、そういうのは古いですよって、私、またそこでロックのこぶしを上げてきたんですけど、「キュウリが曲がっていても、それからキャベツが虫に食われていても、それは安全な証だから、それで悪いというんじゃないで、そういうものこそいいんだというふうに価値観を変えていきましょうよ」なんて言って帰ってきたんですけど、ぜひこれから、食器を新しくしたいわという方は、GL21というコーナーが、かなり最近、デパートとかでもありますので、そのリサイクル陶器を見て、その後いろいろ検討していただけたらなと思いますけど、この私も、自分でつくったエコバッグなんかも、30%ペットボトルの再生のものが入っていたり、多分皆さんのお仕事、生活の中でもいろいろなものをつくって売るといってお仕事をしている方も多いと思うんですけど、なるべくそういうものを使って、循環していくように。サステナブルというとちょっと難しいんですけど、要するには、サステナブルという言葉が頻繁に使われるようになってしまった裏には、もう持続しなくなってしまうということだと思っております。ですから、持続してい

けるように、1つしかないエネルギーですから、自分のエネルギーを大切にするように、地球のエネルギーも大切にしてもらえたらと思います。みんなで頑張ってやっていきましょう。どうぞよろしくお願いします。長くなりまして、すみません。(拍手)

司会

どうもありがとうございました。地球大好き、自然大好き、愛情いっぱいの白井さんにお話をいただきました。

それでは、これからミニコンサートをお楽しみいただきたいと思います。先ほどからポロポロッとギターが聞こえてまいりましたけれども、本日のギター伴奏として、白井さんと一緒に音楽活動をしている、THE CRAZY BOYSのリードギターの本田清巳さんに加わっていただきます。なお、本田さんは、白井さんの人生のパートナーでもいらっしゃるそうです。そして、後ほど登場いたしますタンポポ児童合唱団は、現在花見川区を拠点に活動しています。今年発足25周年を迎えました。メンバーは小学生から高校生まで、総勢21名ですが、今日は13名での参加となりました。

それでは、これからのミニコンサートの進行は、再び白井さんにお任せしたいと思います。それでは、よろしく願いいたします。

白井貴子 氏

ありがとうございます。話、長かったですか？ なんか、のど自慢みたいに、「チーンッ」とか言ってもらわないと、なかなかとまらなくなっちゃって……。

きょうは、何かすごくいい企画をいただきまして、おしゃべりだけでなく、歌も歌っちゃおうということで、歌ってみたいと思います。

あれ、普通だったら、なんか拍手いただいたりするのに……。 (拍手) すみません。(笑)

いや、時々ね、文句言われちゃうときあるんですよ。おしゃべりずっとしていると、講演だって書いてあるのに、「そんなことどうでもいいから早く歌ってよ」とか言われたりなんかして。そう言われるときもよくあるんですけどもね、まあ、本業は歌手で、きょうは、ほんとうにありがたいことに、11月1日で、デビューの日をこの千葉で迎えさせていただいて、すごくうれしいです。ありがとうございます。(拍手)

なんか、90年代からつくった優しい曲もたくさんあるんですけども、まあ、せっかくデビューの日ということもありますし、それこそ、さっきの、冗談のように言った元副大統領のゴアさんが、大変な地球の危機かもしれないけど、そんなときこそが違う生き方に変えていくチャンスなんだというふうに彼は言われていました。その言葉を聞いたときに、よし、これでまた再び「CHANCE!」が目の目を見るぞと思っていたんですけど、全然、だれも言ってくれないんで、私が頑張って伝承していきたいと思いますけど、知っている人も、知らない人も、一緒にぜひ、「CHANCE!」という曲があります。歌ってみたいと思います。

(ミニコンサート)

司会

どうもありがとうございました。白井さん、そしてギターの本田さん、そしてタンポポ児童合唱団の皆さん、いま一度大きな拍手をお送りください。(拍手)

明るく、そして澄んだ歌声を聞かせていただきました。この瞬間のCO₂の削減は随分だったのではないかと思います。とても元気をいただいた気がいたします。ほんとうにすてきな歌声をありがとうございました。

大変すてきな歌声を聞いていただきました。それでは、ここで、10分間の休憩をとりた

と思います。この後、パネルディスカッションの準備をしたいと思いますので、パネルディスカッションは、この後3時30分ごろから始めさせていただきたいと思いますので、どうぞ、その時間になりましたら、こちらのお席のほうにお戻りいただきますようお願いいたします。なお、ロビーにおいて、「平成19年度わたしがつくったマイバッグ環境大臣賞」の応募作品の展示を行っておりますので、どうぞごらんください。

それでは、3時30分ごろになりましたら、こちらのお席にお戻りいただきますようお願いいたします。

(休 憩)

パネルディスカッション

司会

それでは、お待たせいたしました。第2部、パネルディスカッションの開演です。まず、コーディネーターとパネリストの方々を紹介させていただきます。

コーディネーターは、千葉大学法経学部教授で、環境問題に造詣の深い、倉阪秀史先生です。

次に、パネリストの方々をご紹介します。

まず、NPO 団体 GONET（ごみゼロネットちば 21）の代表の井上健治さんです。井上さんは、地域づくりや人づくりなど、地域での行動が環境問題の解決につながるとお考えのことです。

続きまして、「焼却ごみ 1/3 削減」推進市民会議委員の表知子さんです。表さんは、市でこの夏立ち上げた「焼却ごみ 1/3 削減」推進市民会議の公募委員のお一人で、学生時代から環境問題に関心があり、現在も環境市民団体のボランティアをお続けです。3歳のお子さんの子育て中でいらっしゃるそうです。

続いて、南町共栄会会長の児玉谷弘さんです。児玉谷さんは、JR 蘇我駅の山側に位置する同町内会長を6年なさっていますが、安全、安心で清潔な町づくりを目標に、町の美化と不法投棄対策を積極的に実施しています。

続いて、イオンリテール株式会社の環境社会貢献部長の高橋晋さんです。イオンリテール株式会社は、今年8月にイオン株式会社からスーパーなど小売事業が継承された会社ですが、高橋さんは、前身のイオン株式会社から環境社会貢献部長として、環境保全活動を全国で繰り広げているイオンの施策を推進してこられました。

それから、そのお隣は、千葉大学環境 ISO 学生委員会の深沢あゆみさんです。深沢さんは、当初は環境 ISO 学生委員会の紙班の班長として、また翌年度は行動計画部長として大学内のミックス古紙回収プロジェクトなどに携わってきました。現在4年生でいらっしゃいます。

そして、最後になりますが、千葉市からは林副市長が参加いたします。

以上の方々によりまして、パネルディスカッションを進めていただきたいと思います。それでは、進行は倉阪先生にお願いしたいと思います。先生、お願いいたします。

倉阪教授

はい。倉阪でございます。これからの1時間弱、千葉市が今取り組んでおります「焼却ごみ 1/3 削減」の施策について、さまざまな関係者の方々にお集まりいただきましたので、パネルディスカッションを進めていきたいと思っております。

私は、「焼却ごみ 1/3 削減」に当たりまして、平成19年にできました一般廃棄物の処理基本計画の計画づくりに委員として参加させていただきました。この「焼却ごみ 1/3 削減」というのは、なかなか簡単なことではございません。これがもしも実現できましたら、千葉市は日本の中で一番ごみ排出量の少ない、リサイクルの進んだ市になる、こういうものでございます。この大きな目標について、今千葉市のほうでどういうふうに取り組んでいらっしゃるかということをお聞きを、その後、パネリストの皆さんのお話を聞きたいと思っております。

それでは、林副市長、現在の取り組みの内容についてお教えいただければと思います。よろしく申し上げます。

林副市長

それでは、私から千葉市の「焼却ごみ 1/3 削減」の取り組みについてご説明いたします。

皆さんにはふだん、ごみ削減に大変協力いただいております、ありがとうございます。

最初に、一般廃棄物ごみ処理基本計画についてご説明し、その後、計画の初年度であります平成19年度からの主な取り組みについてお話ししたいと思います。

それでは、お手元に黄色の「挑戦！焼却ごみ1/3削減」というパンフレットをお配りしてあるかと思っておりますので、このパンフレットに基づきましてお話ししたいと思います。

まず、このパンフレットを左右に開いていただきたいと思います。左ページにはごみ処理の現状と課題、それから右ページにはごみ処理計画の概要が書かれています。まず、左ページの「ごみ処理の現状」をごらんください。なお、ここに数値が書いてありますが、これは計画の基準年であります平成16年度の数字であります。

上から順にお話ししますと、まず、平成16年度のごみの総排出量は42万2千トン、焼却処理量、燃やす処理量ですが、33万8千トンとなっております。また、これによりまして温室効果ガスの排出量が11万2千トン出ているという現状です。

次に、再生利用率ですが、これはごみの総排出量に対するびん・缶・古紙などの資源化量の割合ですが、22%となっております。また、最終処分率、これはごみの総排出量に対する埋め立て量の割合です。埋め立て処分している割合が8.2%となっております。最後に、ごみ処理の総費用、かかるコストですが、161億円かかっているということで、右のグラフのように、年々増えているというような状況が平成16年度までのごみ処理の状況であります。

これらを受けたごみ処理の課題がその下に書いてあります。千葉市では、この3に書いてありますように、温室効果ガスの削減、また4にあります、3つの清掃工場体制の抜本的な対策、それから5にあります、若葉区にあります新内陸最終処分場、最後に燃やしたごみの、灰とか、燃えないもの、こういったものを埋めているわけですが、そういった最終処分場の延命などの課題を積極的に解決していく必要があります。これらの課題を解決するために千葉市が掲げたビジョンが右ページの上にあります。「環境と資源、次世代のために今できること」～挑戦！焼却ごみ1/3～であります。このビジョンで、平成19年度から28年度、10年間ですが、焼却ごみを10万トン減らして、現在の3清掃工場体制から2つの清掃工場体制へと実現を目指すということを掲げました。

ビジョンに基づきます平成28年度の目標値がその下に書いてございます。計画では、以下の5項目について数値目標を掲げております。まず、目標の1、ごみの総排出量ですが、10年間で、人口は増加しますが、増加しても、ごみの総排出量は42万トンということで、増やさないということを目指しております。それから、続いて、分別の徹底などによりまして、目標2の再生利用率を現状の22%から44%に、倍に大幅に引き上げます。また、目標3の最終処分率については、8.2%から3%に大きく削減をいたします。そして、目標の4の焼却処理量につきましては、25万4千トンに削減、量にいたしますと約10万トン削減することによりまして、目標後の温室効果ガスを焼却処理量の削減によりまして結果として11万2千トンから5万トンに、半分以下に削減するという目標としております。これらを達成いたしますと、下に「ビジョンの達成による効果」と書いてありますが、清掃工場の建設費用が節減されます。また、焼却に伴う温室効果ガスの削減、また最終処分場の延命化も可能となります。現在千葉市では、この目標を達成するためにさまざまな事業を展開しているところでございます。

パンフレットを内側から左右に、このようにまた開いていただきたいと思います。ここにさまざまな事業の内容が書いてあります。一番左側のページに、基本方針および個別事業、右側3ページが、「皆さんと市の具体的な取り組み」となっております。きょうは、時間の関係で、この左のページだけを説明させていただきます。

左のページには、3つの基本方針と29の個別事業を記載しております。基本方針1は、ごみを作らない、出さない、環境づくりの推進であります。ここに10の個別事業を書いて

おります。また、基本方針 2 は、徹底した分別による焼却ごみ削減の推進で、ここには 9 つの個別事業を書いております。また、一番下の基本方針 3 は、環境負荷の低減と経済性・効率性を考慮したごみ処理の推進で、ここには 10 の個別事業があります。

以上のように、この計画は具体的な数値目標を定め、3 つの基本方針に基づき各事業を展開することによりまして、「焼却ごみ 1/3 削減」を実現しようとするものであります。計画は以上のようなことになっております。後でまた右のほうは見ていただきたいと思います。

次に、千葉市が平成 19 年度から現在まで、1 年半になります、具体的に実施している主な取り組みについて幾つかご紹介をいたしたいと思っております。別添資料をごらんください。この 1 枚の紙が挟み込んであるかと思っております。

まず、市内のごみステーションで分別を呼びかける早朝啓発事業を行いました。昨年 8 月に、鶴岡市長をはじめとする市の職員、もちろん私も参加いたしました。町内自治会の方々にも多数ご参加いただきまして、延べ 6 千人以上で市内の全域のごみステーションで分別のキャンペーンを実施いたしました。また、今年 5 月にも、延べ 3 千人以上で第 2 回目を実施いたしております。

また、昨年 7 月には、計画推進のシンボルとなりますキャラクターとその愛称を公募いたしました。親しみやすいキャッチコピーとそのロゴデザインといったもので、この(2)に書いてありますようなものが市民から提案いただき、投票を得てこのキャラクターに決定いたしております。

次に、モノレールやごみ収集車にラッピング、あるいはステッカーを張ったりしまして、この 1/3 削減を PR しております。(3)に書いてあるとおりです。

それから、さらに今年の 4 月に、小学生の入学式が市内全校で行われておりますが、ここで「へらそうくんあめ」という、1 年生に親しまれるようなあめをつくりまして、これをすべての 1 年生に配布いたしまして、児童のいる家庭へ 1/3 削減を PR いたしております。

また、今年 7 月には、ここの(5)に書いてありますが、市民・事業者の皆様と市が連携しながらごみ削減の具体策を検討・実践するための「焼却ごみ 1/3 削減」推進市民会議を立ち上げました。今日もメンバーの方においでいただいております。

また、今年 8 月に、小学生に実際のごみステーションでごみの分別状況がどうなっているかをチェックしてもらい、「へらソーズ」というチーム、この写真の(6)にありますようなユニフォームを来て、ごみステーションでチェックを行いました。まだ少し、出してはいけなような雑紙などが入っているというようなことも小学生の皆さんがチェックして、また各家庭で気をつけようというような話をさせていただき、そういう様な試みを行っております。

こういった試みを行っております、これらの取り組みによる結果今までどうなっているかということなのですが、市民・事業者の皆様のご協力のおかげをもちまして、平成 19 年度の焼却ごみの量は、前年度、18 年度と比較して 2 万 4 千トン減りました。そして、今年度も、9 月までの半年間で、19 年度と比較して 8 千トン減量しているというような状況でございます。

こういったことで、滑り出しは非常に順調にしております。しかしながら、これからはやはり「焼却ごみ 1/3 削減」の道のり、さらに厳しくなるのかなど。減量が進めば進むほどまた厳しいものになってくるのが予想されます。市といたしましても、今後も 10 万トン削減を目指しまして、プラスチック製の容器包装の分別・再資源化など、さらに各種施策を積極的に実施してまいりますので、どうか皆様には引き続きご協力を賜りますようお願い申し上げます。

以上で、「焼却ごみ 1/3 削減」の現在の市の取り組み、計画の説明を終わりにいたします。

倉阪教授

ありがとうございます。滑り出しは順調に削減されているということですが、目標年度までに、市民1人1日当たり739グラムまで落とそうというのが目標でございます。現状は1,036グラムですから、1人1日300グラムずつごみの排出量を減らしていくこととなります。これもかなり高い目標なんです。それに加えて、リサイクル率を倍にしようということですね。したがって、私、委員をやっているときに、これほんとうにできますかね、大丈夫ですかねと、そういった話もしながら、でもこれはやるんですということを進めているかなり画期的な施策であるということでございます。

それでは、パネリストの皆様から、自己紹介も兼ねて、それぞれの立場で、どういったことでごみ減量をやられているのかということをお聞きしたいと思います。

順番としては、井上さんのほうから始めていただきたいと思います。それでは、NPOの立場ということで、よろしくお願ひいたします。

井上代表

皆さん、こんにちは。ちょっとあがっております。何かまぶしくて、すごい、あれなんですけれども。

GONETという団体です。別にゴネる団体ではないですけれども、ごみゼロネットワーク、要するに、団体であって、個人個人の集まり、情報をいろいろ交換する、そういうグループです。8年前に立ち上がっています。その中で、各地域で、県内にメンバーさんがおられますので、いろんな活動をしています。最近ちょっと話題になっているのが、例のペットボトルキャップです。ご存じの方、おられますか、「キャップを集めてワクチンを」というような運動をされているんですけれども。ありがとうございます。

実は、ちょっと誤解も生んでいるんです。エコキャップという運動で集めていますのは、主に神奈川のグループです。私たちは、ペットボトルキャップリサイクル運動という言い方をしています。集めるのは市民です。私たちも集めますけれども、市民の方にやっただく。今40カ所の拠点がありまして、20カ所ぐらいが千葉市にあるですかね。2年半ほど前に始めたんですけれども、このキャップ、2年半でどのくらい集まったと思います？想像つきます？ 個数にして300万個なんです。重量にして約7トン。それが資源に回っています。現在は、木更津にある企業さんが買い取って、ちゃんと資源になっているんです。ですから、そういう、意識を変えていただくというような提案をしているグループです。自分たちもしますけれども、より多くの市民に、子供から先輩方まで、ご年配の方まで、できる範囲で、できることを伝えているグループです。ですから、いろんな活動がある中で、きょうはペットボトルキャップの件をご紹介しましたけれども、そういう活動を通じて、ごみをごみじゃなくて資源に変えていく、そういう活動しております。

倉阪教授

ありがとうございます。ペットボトルキャップは何になるんですか。

井上代表

はい。これは、約30%がそのものに使われるんですけれども、建築材料のコンパネってわかりますかね、ベニヤの板のような感じになるんです。廃木材が50%、キャップが30%、それから20%の軟質プラスチック、それでボードになります。それは製品化されて市販されています。

倉阪教授

市のほうでペットボトルは回収していますけれども、キャップはキャップで回収すれば資源になるという活動をされているということです。

それでは、今度は、「焼却ごみ 1/3 削減」の推進市民会議であって、主婦でいらっしやいます、表さんのほうから、よろしくお願いします。

表委員

表知子と申します。先ほど副市長さんからも話があった、千葉市の「焼却ごみ 1/3 削減」の推進市民会議の公募が今年ありまして、それに応募させていただいて、今委員をさせていただいております。ほかで活動していることとしては、もともと学生時代から環境問題等に関心があって、出産前まで有機野菜の宅配会社の「大地を守る会」というところで働いておりまして、今も、会社が市民団体も兼ねているものですから、その中の「ゴミリ倶楽部」という、ごみ削減運動をしているグループで、消費者の立場として活動を続けています。どういうことをやっているかという、古布を使ったマイバッグづくりの講座をやったり、あと、古布を使った布ぞうり、最近はやりですけれども、その講座をやったり、あと、大地を守る会のほうにリユースのびんのしょうゆを開発してくれないかと掛け合ったり、またイベントでリユース食器、例えばイベントで出店があったときに、そこでリユース食器を使ってもらって、それを食べた人がブースのほうに戻すと、最初にデポジットといってお金を 100 円多く払ってもらって、そのリユースの食器を使って返すと 100 円がまた戻ってくるというようなことを導入したりとか、そういうようなことを活動で行っています。

焼却ごみ 1/3 削減推進市民会議のほうでは、まだ 7 月に始まったばかりで、どういうことができるかというのをみんなで話し合っている最中なので、まだ特に実績というのはないんですけども、これから頑張っていこうかなと思っています。

個人的には、ほとんどの生活は主婦として暮らしていますので、子供の世話もありますし、そういう中で、大酒飲みの夫のビールをちょっと缶からびんに無理やり変えさせたり、あと、最近生ごみを、ちょっと庭があるので、そこに埋めるような感じにしてみたらかなりごみが減りました。あと、マイバッグを持って、ポイントをためて、そのたまったポイントで 100 円分何かを買うとか、それを楽しみにしている、ほんとうに一般的な主婦として活動しています。

倉阪教授

ありがとうございます。それでは、次に、南町共栄会の児玉谷さんのほうから、町内会としてどういう活動をされているのかということを中心に、よろしく願いいたします。

児玉谷会長

児玉谷でございます。後ろのほう、聞こえますね。

単一町会としましては、パンフレットにも書いていますけれども、世帯数では、千葉市でも五本の指ぐらいに入りますので、全所帯数で 1,850 世帯です。戸建てが大体 1,100 軒、ですから、残りの 800 軒ほどが集合住宅。ただ、集合住宅というのは、最近の立派なマンションもありますけれども、昔のアパートというようなところがあります。

うちの町会の活動方針というのは、ここにも書いていますように、安全で、安心で、清潔な町づくりをしましょうということですから、安全・安心、いわゆるパトロールと、それから清潔、衛生部の業務等を一体化しています。特にパトロールについては、ここ数年間頑張っておとし、全国表彰を受けました。今年もちょっと 2 つほど表彰を受けましたが、そのもとになっているのが、町をきれいにしようよということで、パトロールをしながら、不法投棄であるとか、そういうものを探したりしています。現在、ごみステーションは 37 カ所あります。このうち 30 カ所ぐらいが、メタルラスでつくった、型鋼で囲ったステーションです。それにガラスよけの網をかぶせているということです。これの費用

が1個大体2万7,000円ぐらいしましたので、ここ数年間で、ごみステーションをつくる費用だけで町会として大体80万円から100万円近くのお金を使っています。ただ、それだけに効果は上がっています。

ただ、最近残念なのは、カラスと猫はいなくなっただけですけども、不法投棄の目標にされるんですね。かごの外側へ置いていくというのが1つの悩みになっています。一部撤去を試みたり、それからステーションに近づいたら電気がパッとつくようにやっているんですけど、だんだんなれてきて、電気のつかないところから捨てていくというような方もいますので、ちょっと困っているといえれば困っています。

それから、じゃ、不法投棄にどういうことをしているかといいますと、19年度の例でちょっと数字を申し上げますと、ごみステーションと空き地、この空き地は民地なんですけれども、市ですと、民有地の不法投棄は回収してくれませんので、地主さんをよく知っている町会の衛生部長さんが話をして、というよりは、まあ、地主さんに喜ばれて、回収をしています。去年12回、ですから、毎月1回ぐらい、12月は2回ほどやったと思いますけど、回収しています。これは町会でこれ用にトラックを60万円ほどで買わせて、やっと3年年賦が払い終わりましたけれども、便利に扱っております。なおかつ、この軽四輪を青パトロールにも使っています。資格を取って行っています。こういうふうを集めたものを環境事業所が非常によく面倒みていただいています、去年は7回集めにきてもらっています。我々が集めたら大体3日間以内ぐらいに持って行ってもらう。

それ以外に、バックボーンとしていた、我々は、窓割れ理論と、アメリカの地下鉄の汚さ、特に最近やっている、アメリカのテレビでもやっていたけれども、いたずら書き、落書き、これが増えると犯罪が増えるということですから、現在ですと、高利貸しの看板、これはあくまで落書きだと我々は思っていますので、おとしは500枚ぐらい外しています。去年は109枚だったと思いますけれども、ともかく朝見たら夕方外す。びっくりされると思いますが、蘇我駅の近辺へ来てサラ金の看板を探してもらっても容易に見当たらないぐらいきれいになっています。これは駅から500メートル以内については、どなたに見ていただいても、きれいな状況になっています。

あと、蘇我駅の近辺というのは放置自転車が非常に多うございまして、スクーター、オートバイ等を入れると、衛生部長さんが月に1回調べるんですけど、大体300台から500台ぐらい放置されています。新しい駐輪場の3階建ての計画もありますけれども、それらについても現在市といろいろお話をしています。

ということで、それ以外にやっていることといいますと、町会で一生懸命勉強しようということで、こういう冊子をつくって、前のほうが、自分の町会の中でいいところ、悪いところの写真を入れています。後ろのほうにいきますと、千葉市の1/3減らす記事が入っています。こういうものをつくって、要するに、自分の町がどんな状況かわかるようにしています。最近振り込み詐欺が多いので、今年は振り込み詐欺の資料をつくって皆さんに配っています。というような、ITを極力使っているいろいろなことをやっています。今、びん・缶については大分うまくなっただけですが、衛生部長さんが古紙について巡回して、集めて、非常によく整理してくれていますけれども、まだまだなのかなと。というのは、ごみを出す人の教育がまだまだなのかなと。町会としては一生懸命やっているつもりなんです、そこが課題なのかなと思っています。

あとは、当然、ごみゼロクリーンデーなどには、子供たち五、六十名に参加してもらっていますので、以上です。

倉阪教授

はい、ありがとうございます。私もさっきその資料を見せていただいたんですが、パワーポイントできれいに作られていて、かなり有効かなというふうに思います。

それでは、今度は事業者の代表ということで、イオンリテールの高橋さんをお願いいたします。

高橋部長

家庭ごみが非常に多いということですが、いろいろなお客様とお話をしていると、これは家庭から出たごみではない、スーパーから出たごみが家庭を經由して出ているんだと。これがほんとうに本質的なことだというふうに理解しています。

企業として 3R についてどういうことをやっているかということにつきましてちょっとご紹介しますと、例えば食品の残さ、いわゆる食べられるものを捨ててしまう、これはまさに経費的なところにも、それからいろいろな意味で私たちのビジネスのレベルまで問われることですので、これはやはり真剣にやっております、いわゆる食品の売り上げの中で1%以内に抑えようということで、今1%以内になっています。そして出たものを今度はブタの飼料にして、そしてブタを育てて、そのブタ肉を販売していこうと、こういうようなことも食品については実施しております。

それから、いろんなお店にいきますと、野菜とか果物はばら売りをしているわけですが、ひとつは、産地が自分の産地の名前を書いて、段ボールに入れて出荷する。しかし、店に来たら、それはもうすぐ取り出して、店の並べ方で陳列するということです。このむだを、いわゆるリターナブルコンテナ、通い箱ということにして、産地でそのまま入れて、お店でそのまま売って、そして段ボールを使わない、こういうこともかなり定着して、衣料品の段ボール、リターナブルコンテナとか、ハンガー納品だとか、こんなこともかなり成果が出てきております。

それから、店頭で回収、これはまさにお客様にご協力いただいているわけですが、牛乳パック、食品トレイ、アルミ缶、ペットボトル、それから最近はペットボトルキャップも回収を始めております。あと、卵パック、こういうものも積極的に回収をしております。全国で6,500トンぐらい回収、これはどんどん増えています。ありがたいことに、ほんとうにお客様がきれいに洗って持ってきていただいている。資源だということの認識が非常にできております。

それから、やはり力を入れているのは、いわゆるレジ袋の削減でございます。大幅削減ということで、私どももいろいろ努力をしてきましたが、やはりポイントをつける、スタンプカードをつけるやり方だけでは25%ぐらいしか減らないということで、無料配布を中止するという、まさにお客様のご理解がなければ進まない施策ですが、これを、2007年の1月に京都の東山二条で始めて、そこは17%ぐらいしかマイバックの持参率がなかったんですけども、無料配布を中止したら8割減りました。こういうことをしながら、今全国41都市で、345店舗でこの無料配布中止をしております。レジ袋をむだだ、マイバックを持ってくれば使わなくて済むという、これがお客様と一緒にできたら、その次に、店内にある過剰包装、トレイも含めて、こういうもののいわゆる本命を切り込むことができるんじゃないかというふうに考えています。

もちろん、簡単にやればいいとおっしゃる方も多いんですけども、やっぱり安全・安心ということ、特に食品は、こういうことがやはりものすごく大きな問題です。ですから、これと、むだなものを減らすというバランスをどうとるかということを実業者としては真剣に考えております。しかし、お客様の理解がどんどん進んでいますので、もっともっと私たちも、お客様におくれないようにしっかりやっていきたいというふうに考えています。

以上です。

倉阪教授

ありがとうございます。イオンの取り組みにはさまざまな取り組みがあって、短い時間

でご紹介するにはなかなか時間が足りなくて恐縮でしたが、資料の 24、25 ページに具体的にさまざま載っておりますので、参考にしていただければと思います。

それでは、深沢さんのほうから、今度は千葉大学の学生の取り組みについて、よろしくをお願いします。

深沢委員

千葉大学環境 ISO 学生委員会の深沢と申します。私からは、まず、うちの委員会の説明と、あとは 3R 活動に関する説明を簡単にしたいと思います。

まず、私たちの委員会の特徴としましては、学生が、大学の環境マネジメントシステムの運用に主体的にかかわっているという点にあります。また、それが授業科目として活動が単位化されているという点もあります。その結果としまして、千葉大学の 4 つのキャンパスで ISO14001 の認証をすべて取得しております。

また、具体的な 3R 活動につきましては、まず、2006 年 4 月からレジ袋の有料化を始めています。また、このレジ袋有料化によって集まった基金によりまして、こういったエコバッグをつくりまして、生協の店舗で販売しています。また、マイ箸なども販売しています。また、その翌年の 2007 年 4 月からは、先ほど千葉市の中でも古紙の回収の話がありましたけれども、ミックス古紙の回収というプロジェクトをスタートさせまして、汚れのない雑紙の回収ができるようなシステムをスタートさせました。

また、一番最近のプロジェクトとしましては、こちらのリターナブルびんの開発プロジェクトに学生委員会のメンバーが参加しまして、名称の決定やびんの仕様の開発に携わりました。こちらは、ちょうどタイムリーなことに、昨日から明日まで、千葉大学の大学祭でテスト販売を行っておりまして、1 本 130 円で販売しておりますので、お時間のある方は、よろしければ大学祭のほうに行かれて、お手に取ってみてください。

私からは以上です。

倉阪教授

1 本 130 円のうち 30 円はデポジットと言わないと、高過ぎて、みんな買ってくれませんので。30 円がデポジットで、そのびんを返したら 30 円戻ってくるとこういうことで回収を進めようということをやっています。

それぞれの立場で具体的な取り組みをお聞きしたわけですがけれども、資源という認識をちゃんと持つ必要があるというお話がありました。ペットボトルキャップとか、従来はごみだと思っていたものでも、ちゃんと資源になります。児玉谷さんのお話から古紙はまだまだだという話もありましたけれども、雑紙でもちゃんと資源であるという認識を持って、ごみに入れないといった方向の取り組みが行われています。それから、むだをなくす取り組みとして、レジ袋であるとか、そういう、従来から使っていたものでも、ちょっと見方を変えれば要らなくなるんじゃないか、そういうような取り組みも必要になってくると思います。今回の資料の一番後ろに、全市の焼却ごみの量ということでグラフが載っているかと思いますが、この累計を見ると副市長のお話のように確実に減っているわけですがけれども、ごみの中でどこのあたりが減っているのかということについて、林副市長に補足的にお伺いします。

林副市長

それでは、ちょっと説明をいたしますと、大きくは、ごみの出るところというのは家庭と事業所と 2 つに分かれるんですが、大体家庭系ごみ、事業系ごみ、それぞれ大きく減っております。家庭系ごみは大体計画どおり減っているんですが、事業系ごみのほうが計画をさらに超えて減っております。事業系ごみは事業所のほうの義務で、市の焼却工場

に持っていくときにはお金をいただくわけですが、そういった代金を少し高くしたり、そういったこともやっておりますので、事業系のほうは、そういう自助努力でなるべく減らしてコストを減らそうというようなことも多分要因になって、かなり大きく減っているのかなど、こう思っております。

そんなところがあるんですが、逆に言うと、減らない要因というのも多分あって、これは私も、ちょっと自分の経験から言うと、例えば紙のごみのうち半分ぐらいは雑紙なんですけれども、雑紙の分別ってなかなか難しく、前は、束ねて、ひもで縛ってというようなことをお願いしていたんですが、私もやってみて、そういうまめな人もいますでしょうけれども、ちょっとやりにくいということで、雑紙をもうちょっと簡単に出不せないかというようなことは反省としてあって、今では雑紙は紙の袋の中に入れてもらえれば結構ですよというようなことにして、家庭から出るような雑紙の分別を進めているようなことをやっています。

それからまた、レジ袋も結構まだ減らないであるんだろうと思うのですが、私もマイバッグというのを3つぐらいもらって、家には私のマイバッグが3つあるんですけれども、いつも通勤のときに持っていくバッグの中に入れてはあるんですけれども、たまたまスーパーなんかに行くときに限ってなかったりして、まあ、しょうがない、レジ袋下さいとか言うときもありますので、マイバッグ利用率が半分ぐらいだと思います。ういうこともあり、まあ、意識はあるんですけれども、まだ行動が少し伴わないとか、まめな人を前提にいろんなことをお願いするのはちょっと難しく、やはり普通の人とか、普通の主婦なり、普通のサラリーマンがやりやすいような分別の仕方みたいなものをもっともって考えていかないといかんなどというようなことを考えています。

それから、早朝啓発で私も行ってやったんですけれども、ある程度高齢の方とか、非常に協力していただいておりますが、アパート暮らしの若い方とかという方は、やはり忙しいとかいろいろあって、難しいところもある。きょうは、大学生が来ていて、申しわけないんですけれども、そういう若い人に向かっての啓発というようなことで、今、マリンスタジアムとか、フクダ電子アリーナとか、ああいうところを使った啓発などもやっておりますが、例えば、コンビニを使って、コンビニに来る人に少しお願いするとか、ステーションで啓発するだけじゃなくて、そういう若い人をターゲットにしたような啓発活動なんかもしなければ、ちょっと、今の家庭ごみのほうの減り方ももう少し進むのかなど、こういうような感想を持っております。以上です。

倉阪教授

ありがとうございます。千葉大学も、ミックス古紙の分別回収は、事業系の一般廃棄物の受け入れ手数料が上がったので、紙を従来どおり焼却ごみに入れていたのではお金がかかってしまうということで、学生と一緒に検討して始めたということになります。

家庭系のごみについて、今までのところは計画どおりということでございますが、今後さらに減らしていく、そういう必要があるわけです。今後どういうふうなことを気をつけていくべきか、それぞれの取り組みのほうでも結構ですし、市への提言でも結構ですので、もう一回パネリストのほうにマイクを回したいと思います。1人2分ぐらいで、よろしくお願ひします。

井上代表

ごみの概念って、実はここにいる皆さん全員違うんです。私たちは、このキャップは資源だと思っているんですけれども、知らない方はただのごみです。それから、ごみの捨て方にしても、このまま捨てる方もいます。それから、ラベルを取って、キャップを外して、洗ってちゃんと出している方もおられます。その中で、ごみ減量というのは、実は市民一

一人の皆さんがすごくキーワードを持っていると思うのです。それをごみにするか、資源にするか、ですよね。ちょっと私たちの先輩の方は、こういう服にしても、すべて雑巾にかわっていたんですね。今、こういう衣料、相当な量が家庭に眠っています。ですから、それをどうするかは皆さん次第だと思うのです。先ほど1人1,000グラムと。ですから、4人家族でしたら4キロというごみが出ているわけです。100グラムというと、わかりやすい言い方をすると卵2個分です。それを皆さんが、90万都市の市民が全員されたら、単純計算すると16億円浮くんですよ。先ほど、年間の処理費用が160億円とありましたね。これ、私たちはすごくもったいないと思うのです。まあ、言い方はあれですけども、ごみを燃やすために160億円のお金を使っているわけです。それを皆さんがどう考えるかなんです。減らすか減らさないかというよりも、もったいないという感覚のほうが実は大きいんじゃないかなと思います。

そういうことのいろいろ情報交換とか、地域の中の自治会の中でされていることでもいろいろあると思うのです。生ごみを堆肥にされているとか。そういうことをどんどん、自分の周りの方に伝えて、それを広めていただければ、簡単に1/3削減なんかは実現できるんじゃないか。同時に、環境もよくなります、それから自分たちの子孫にもいい環境を残していけると私は思うのですけれども。

倉阪教授

極めてわかりやすい言葉で今語っていただきました。こういうようなわかりやすさというのは重要なことというふうに思います。

それでは、表さん、お願いします。

表委員

私は、先ほど言った市の焼却ごみ1/3削減の推進委員を始めたばかりですので、それが2年任期がありますので、その中でまず頑張っていきたいなと思います。まだ会議が3回ぐらいしかない中で思ったのは、そういう会議に参加してくる方、かなりご年配の方が多くて、私のような、小さい子供を育てている人というのは、公募委員の中では1人だったんです。やっぱりそれだからこそできることがあるかなと。子育て世代というのは、子育てが中心になってしまうので、それ以外の、例えばごみ問題とかというところになかなか目が向きにくいんですけれども、特に小さい子、うちの息子もまだおむつが外れたばかりですけれども、紙おむつの山を毎日出していたりとか、すごいごみを出す世代でもあるんですね。まあ、そういう中で、主婦として毎日ごみを出すという作業をするのも私たちのので、節約にもなっているとか、少しでも楽しい部分もあってできることがあったら、それを市民会議の中で実現していきたいなと。最終的に、2年終わったときに、報告というだけじゃなくて、実際に実践して、減った部分をきちんと見せることができ、さらにまた2年よりも先に続けていけるような活動がしていきたいなと思っています。

倉阪教授

ありがとうございます。この2年というのは大変重要な2年でございます。パンフレットの一番後ろをごらんいただきますと、中間年度、23年度というのがございます。中間年度の中で見直しをして、その次期計画でさらなる減量施策も検討していくことになっております。まあ、今までは順調ですけども、今後さらに目標達成に向けて、何らか新しいことをやっていくということがあれば、そういう2年の中で頭出しをしていって、中間の見直しにつなげていくという重要な役回りを持っていると思いますので、よろしく願いいたします。

それでは、児玉谷さん、よろしくお願いします。

児玉谷会長

はい。3つほどお願いというのか、来年度やってみたいなと思っていますけれども、1つは、これは千葉市さんに言うのか、自分のところに言うのかよくわからないんですけども、今ごみステーションという名前を使っているんですね。これを資源回収ステーションというように、いわゆる、さっき白井貴子さんが、価値観を変えないと、ということをおっしゃられたと思うのですが、やっぱり一番初めに「ごみ」という言葉があって、分別しなさいというのが今の市のやり方なんですけれども、そうじゃなくて、あなたたちは資源を分別して、要らないものだけをごみ箱に捨ててください、そういうような考え方でいけば、名前を資源回収ステーションというような名前に変えることはできないでしょうかというのが1つ。

それから、それに関連して、井上さんのところでやられていますペットボトルのキャップなんですけれども、うちのペットボトルの集め方を見ていますと、ほとんど栓はついていません。ですから、これを来年度から外してやれるような運動を今計画しようかなと思っています。これは商店会とか、特にコンビニあたりの協力を得ないと難しいんだと思うのですが、コンビニでパンと缶とびんと買ったのを、1つに入れてごみステーションの中へ捨てていく数というのは、さっき出ましたように、若い人に非常に多うございますので、これは売るときから、逆に袋を渡してもらわないほうがいいのかなというような感じもします。

それから、これは最後に1つ、ぜひ副市長さんをはじめ皆さんにお願いしたいんですけども、今うちでごみで一番問題になっているのは不法投棄。不法投棄の中で、道路に捨てたり、いろんなものについてはそれなりにするんですけども、最近、飲み屋さん、いらっしゃったらごめんなさい、いわゆる小規模事業者で、2時か3時ごろまで商売をされて、帰りに、魚のさばいたやつとか肉とかをそのままごみステーションへ、家庭用のごみの中に捨てて帰られる方が結構いらっしゃいます。というのは、蘇我駅の近辺の飲み屋さん街で、そこに住宅を持っている方というのは何割もおられず、ほとんど車で通われていると思うのです。ですから、当然明け方に捨てていってくださる。

この前の早朝啓発のときでも、朝6時半に集まったときにはもうごみステーション満杯で、それ以降来た人は数えるほどしかいなかったというような状態が、特に私どもの近辺の、うちの町会でないところの皆さんから車で毎日運んでいる人が、車のナンバーもわかっているんですけども、そういう方がいらっしゃいます。そういう人について考えたのは、千葉市とか警察とか保健所等で、いわゆる衛生関連とか風俗営業の関係の認可届け出でというのがあると思うのですが、その際に、ごみ処理業者と契約をしている書類をつけることを、いわゆる認可をするため、もしくは届け出を受けるときの条件にしたい。当然、条例を変えてほしいということなんですけど、これはぜひお願いしたいと思います。

非常に悩んでいるんですね。もう、焼き肉屋さんがさばいた肉をそのまま入れていく方もいらっしゃいますので、まあ、ほんとうのことを言うと、こういう話をここでしても意味ないと思っているんですね。よくやっている人はここに出てきていると思うんですけど、ここに出てきていない人がやっているんですね。当日一番困るのは、ふだん日本語話していても、こういう話を注意しに行くと、「私、韓国語以外しゃべれない」、「中国語以外しゃべれない」と、こう来ますので、やっぱり認可するときにそういう条件をつけていただかないと、ちょっと我々の手には負えない部分があります。過去には、袋をあけて、中に入っていた箸袋の紙を見て、その店の前にわざと持っていたというような強行手段もとったことがありますけれども、そのお店はやめますけれども、ほかの方はまた同じことをします。ぜひ条例化についてはご検討をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

倉阪教授

ありがとうございます。ごみステーションの名前を変えるとか具体的な提言をいただきました。事業系の一般廃棄物の処理手数料が上がったせいもあるのかもしれませんが。家庭用のところに不届きな業者さんが捨てにいくという問題も指摘されました。これは市のほうでぜひとも検討していただきたいと思います。

それでは、高橋さん、よろしく願いいたします。

高橋部長

私は、この環境にかかわってほんとうにいろいろな人とお話をするんですけども、レジ袋の削減の件でも非常によくわかったということで、目からうろこのことがあったんですけども、意識を変えれば行動は変わる。意識を変えなければ行動は変わらない。だから、意識だ、意識だと言って、ほんとうにいろいろなことをするんですね。ところが、レジ袋のことでいくと、何十年もこの削減に努力してきた消費団体の方なんかは、こんなにうまくいくと思わなかった、もう拍子抜けしたというようなこと。結局、行動が変われば意識が変わると。まさに、分別をきちんとできる人は、最初は大変だったけれども、やってみたら何のことはないという、こういうことが多分環境のことではないかなと。そして、いわゆるお客様の心理、私も含めてですけども、やはり買いたいものと買えるものは違うし、買うべきものと買ってしまうものも違う。これが人間の心理だと思います。そうすると、私たちも、これ環境にいいんです、でもちょっと高いんです、その分高いんですと、こういうことで理解をしていただいて、そしてコスト計算をしながらということをぎりぎりやっているというやり方をずっとやっています。それはもう、理屈はそうなんですけれども、そうではなくて、企業として最終的に必要な利益がある。そうしたら、環境にいい商品も、もう同じ値段にして、こちらは環境に配慮します、こちらはこのお値段。そうしたときに、お客様がほんとうにこちらのほうを選んでいただく。選んでいただければ、それは経済がよくなって、環境にいいものがほんとうに売れていくという、そういうことをやっていかなければいけない。

よく、JRのトイレなんかに入ると、昔は、「トイレを汚さないでください」と。「一歩前進」とか、いろいろ書いていました。でも、最近は、「きれいに使っていただいてありがとうございます」と。こういう1つのアプローチの仕方、環境に対してこういうことをすれば気持ちいいことだとか、いいことだとか、そういうふうなことを、我々もお客様あつての商売ですから、やっぱり快適に買い物ができるという、そういうことをもうそろそろやるべきではないかと。何か、環境、環境と言ってあまり脅すというか、そういうプレッシャーをかけるのではなくて、お客様には環境というのは楽しいとか、気持ちがいいとか、そしてそれが常識だというふうにしていくようなことも知恵を使ってやっていきたいというふうに思います。

倉阪教授

ありがとうございます。ちょっと、30分になっていますが、ちょっと5分ぐらい延ばさせていただいて、最後までパネルディスカッションを進めたいと思います。

では、深沢さん、お願いします。

深沢委員

今、高橋さんのほうからも意識というお話がありましたけれども、私たちの大学でも、課題となっているのは、やはり学生の意識がなかなか変わっていかないところだと思います。アンケートなんかを実施しますと、もちろんレジ袋を有料化して、学校の外で

もレジ袋をもらわなくなったというような意見もあってうれしいところなんですけれども、逆に、ごみの分別の意識が少し低下しているというデータもありまして、その辺を変えていかなければいけないなというふうに感じています。

具体的には、去年から実施しているミックス古紙回収、雑紙の回収の状況が、今1年たってもあまり状況がよくなって、回収率が低いとか、ほかのごみが混入してしまっているというような状況がありますので、回収率を上げていくということをやっていかなければいけないと思います。今、ごみ担当のほうでごみの分別マニュアルを作成しているようですので、それを見て一目でわかるように、一目でミックス古紙って何だろうというふうに、雑紙がうまく回収に回るようにしていけたらいいなと思っています。

また、先ほど韓国語とか中国語というお話もありましたけれども、今年から千葉大の留学生に向けても環境の知識を研修で教えていこうということで、学内で発行しているパンフレットですとか、環境報告書を学生が英訳作業をしまして留学生向けに発行しているということもやっているの、それをより一層充実させて、大学全体で回収に、3Rのほうに取り組んでいけたらいいなと思っています。

以上です。

倉阪教授

若い人の中でもちゃんと頑張っている人もいますので、こういう頑張っている若い人がどんどん増えていくようにどうすればいいのか考えることも大切です。楽しいいろんな企画を考えるのも重要なことだと思います。「やらされている」感があるとなかなかできないと思いますので、高橋さんもおっしゃっていましたが、普通にできるように工夫をしていくということも必要でしょう。

最後、パネリストの皆さんに一言ずつ感想をと思ったのですが、ちょっと時間がありませんので、代表して、副市長のほうに、これまでのパネルの議論をお聞きいただいた上での千葉市としての決意表明といったもので締めさせていただければありがたいです。よろしくお願いたします。

林副市長

パネラーの皆さんに、もうほんとうにいろいろなところでお知恵を出してもらったり、実際実践してもらってほんとうにありがとうございます。こういった努力の集大成で、かなりごみの削減が進んでいるんだなという実感を改めて持った次第です。順調に今進んでおりますが、冒頭申しましたように、これからがまたやはり胸突き八丁というか、そういうところになりますので、さらに引き続きいろいろご協力をお願いし、市のほうも頑張っていきたいと思いますが、今市のほうでやっておりますのは、紙ごみの次のステップとして、例えば生ごみの分別収集については3つの地区で実験的にモデル事業をお願いして実施しております。それから、プラスチック製容器包装の分別ですとか、また、庭木の剪定枝の再資源化というような、次のステップのものについてもそろそろ少し研究して取り組みを進めていく必要があるかなと思っています。

何しろ、こういったことで、一步一步進んできておりますが、まだまだいろんな意味で、先ほどの市民会議等からのお知恵をいただきながらやっていかないと進まないところもありますので、市民の皆さん、事業所の皆さん、よろしくお願申し上げたいと思います。

それから、先ほどちょっと児玉谷さんのほうからありましたが、小規模事業者からのごみの不法投棄のようなものもありました。これは全市的に非常に困っている問題なので、市としてモデル事業というようなことで、中央区内で、不適正の排出に対してのモデル事業などもちょっと計画しております、1つのきっかけにまた考えていきたいなと思っています。多分、児玉谷さんのやっている町内会もそうなんですけれども、ごみがうまく分

別できて、ごみのない町というのは、ごみだけじゃなくて、花もあるとか、非常にきれいとか、お互いに注意できる自治会、町内会というようなことで、やはりそれをきっかけにして町内会自体が非常にコミュニティーとしてよくなっていく、そういうきっかけにもなるかなど。逆に言うと、そういうものがよくなるとなかなか難しい部分もあるかなど、こういうふうに思っております。

いろいろ市民の皆さんのお知恵もかりながら、またこの焼却ごみの3分の1を進めてまいりますので、よろしくご協力のほどお願い申し上げます。どうもありがとうございます。

倉阪教授

どうもありがとうございました。以上でパネルディスカッションのほうを終わりたいと思います。若干延びてしまって恐縮でございます。今後とも焼却ごみ3分の1という高い目標が達成できるように、市も市民も、頑張っていきたいというふうに思います。どうも今日はありがとうございました。(拍手)

司会

どうもありがとうございました。コーディネーターの倉阪先生、またパネリストの皆様、ありがとうございました。いま一度、大きな拍手をお送りください。(拍手)

会場の皆様、本日はお楽しみいただけましたでしょうか。本日のゼロエミッションフォーラムの中で、地球のため、ごみの減量、再資源化のために、これならできる、できそうだなと思ったことを毎日の生活の中でどうぞ実践してみてください。皆様の行動の一つ一つが千葉市の焼却ごみ1/3削減につながり、さらには地球環境を救う大きな一歩となることと思っております。

それでは、以上をもちまして、本日のゼロエミッションフォーラムを終了といたします。皆様、本日はどうもありがとうございました。お気をつけてお帰りください。

— 了 —